
シャワーツリーは唄う

宮本あおば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャワーツリーは唄う

【NNコード】

N8422W

【作者名】

富本あおば

【あらすじ】

ワイキキのブティックに勤める誠は、ある日兄から連絡の取れない日本人、塩田綾の捜索を頼まれる。彼女の自宅や学校、友人をあたつて行く内に、奇妙な出会いと共に、知らなかつたハワイの暗さを知る。

綾の行方は思いも寄らない形で知られ、誠は決断を迫られる。

第一章・第一話 「依頼」

目覚ましのアラームが鳴る前に目が覚めた。こんな事は年に一度あるかないかだ。

仕事へ行くためにシャワーを使い、朝食兼昼食を摂つている時、自宅の電話が鳴つた。誠は頬張つていたトーストを慌てて飲み下し、IDも見ずに受話器を取つた。

「俺だ、元気か？」

驚いた事に、電話の相手は兄だつた。

三年前に誠がハワイに引つ越してからは、ほとんど電話して来た事はない。時々メールをよこすが、面倒臭がりの誠は五回に一回も返事を書かない。それでも年の離れた兄の悟は怒りもせず、定期的にメールを送つて来る。

「どうしたんだよ、珍しいじゃないか、電話なんて」

内心誠は、何かあつたに違いないと嫌な気がした。家族や親族に何かあつたか。

時計を見ると、午後一時ちょうどを指している。といつことは日本は朝の八時だ。ゴールデン・ウイーク中なのは、悪いニュースに幸いするのだろうか。誠があれこれと思いを巡らせていくと、兄は言いにくそうに切り出した。

「あのな、頼みがあるんだよ。取引先のお嬢さんがハワイに住んでるんだけど、最近連絡がないんだつてさ。お前、様子を見てくれないか」

良くない知らせを覚悟していた誠は、何か気抜けしたが、同時に頭に疑問符が湧いた。

「ええつと、話がよく見えないんだけど、様子を見るつてどういう事？」

ハワイ州の州都、ホノルル市在住の日本人は、様々な「依頼」を受ける事がある。知り合いか行くので案内してやつて欲しい、日本

では入手出来ない物を買って送つて欲しい、などといった事だ。

誠は日本人に人気のブランド店に勤めているので、知り合いが来た際には、まず社員割引をねだられる。しかし今、兄が言つているのは、社割どころの話ではない。

「昨日、お得意の病院の偉いさん達とゴルフに行つてな。そこの院長先生とは初めてだつたんだけど、終わつて飲んでる時に娘さんの話になつて、ハワイに留学中だつて言つから、つい俺も弟がハワイにいるつて話をしちやつたんだ。そしたら実は、娘さんから連絡がなくて、心配してると来たよ。それで頼み込まれちゃつたんだよ」珍しく兄は、弱つた声を出している。

「連絡が取れないつて、どれ位の期間?」

「一ヶ月位だつて」

「一ヶ月!」

誠は大声で繰り返してから続けた。

「そりゃあ、ちょっと様子を見るつて域を越えてるだらつ。領事館と警察に届けるべきだよ」

兄の声は益々弱くなつた。

「そういう届け出は、嫌なんだと。まず様子を見て、それからにしたいそうだ。お得意さんだから、俺も駄目ですとは言えなくてなあ」誠は困惑した。面倒臭い事をするのは御免なのだが、とても兄に向かつては言えない。兄に感じる引け目は大きい。

「じゃあさ、その娘さんの学校とかアパートに行つてみて、ちゃんと元気でいるかどうか確かめればいいのかな?」

「やつてくれるか」

弾んだ声を聞くと、微苦笑が洩れた。めつたにしない頼み事をするのを、気に病んでいたらしい。

誠は咳払いを一つした。

「娘さんの名前と住所、電話番号に、あと学校の名前が必要だね。すぐ本人に会えればいいけど、周りの人に対するカーダと思われないように、家族の手紙があるといいかな」

探偵めいた事をしたことはないが、学校は生徒のプライバシーの保護についてガードが固い筈だ。せめて家族の代理人だという文書でも持つていれば、話は違うかと思ったのだ。本人に会った際に、不審者だと思われるのも避けたい。

本式な物はおそらく、公証人の前で署名した物が必要だらうけれど、とりあえずはないよりましだろう。

手紙に書く内容を伝え、まずはサインしてもらつたものをPDFファイルで、後から郵便で送つてくれるよう頼むと、兄は「娘さん」について知る限りの事を教えてくれた。

名前は塩田綾、三十一歳でハワイには九か月程前に移り、語学学校へ通つていた。ハワイに来る前は、都内の有名女子大を卒業した後、ずっと父親の病院で事務を勤めていたそうだ。

「我が儘で気紛れなところがあるから、不規則な生活が続いてるだけかもと、院長は言つていた。でも心配はしているよ。何たつて昨晩話して、今日連絡欲しいって言われたんだから。それと、バイト代出すつて言つたのを俺が遠慮したから、俺がお前にバイト代出すわ」

最初から「金を払うからやつてくれ」と言わないところが兄らしい。誠は「じゃあすごい額を請求するよ」と、ふざけてみせた。

調子に乗るなよ、と切り返しながらも、「手間かけて悪いな。俺、営業の仕事は好きなんだけど、家族にまで迷惑かけるのは良くないよな」と、兄は真面目に言った。

一流大学を出て大手製薬会社に勤めた兄は、今は、ある地方支社営業部で管理職を勤めている。

誠は一年前の、兄の結婚式を思い出した。想像以上に招待客も多く、特に兄の仕事関係が多かつたため、恥をかかせないようにするのに骨を折つた。

「こういうのも仕事の内だろ、仕方ないじゃないか。俺の事なら気にしないでいいよ。大した手間じゃないんだし」

再び兄は生真面目に礼を言い、電話を切った。直前に、「そういう、ルームメイトの彼によるしづな」と言い添えたのに、誠は冷やりとした。

受話器を置いて、誠は煙草に火を点けた。「ルームメイトの彼」は仕事に行つてしまつていないので出来る仕業だ。嫌煙家の彼がいる時は、ベランダで吸う約束になつていて。

実は彼がただのルームメイトではない、と兄に告げたらどんな顔をするだろう。想像して誠は、煙と共に溜息を吐き出した。

南を向いて開いている窓から、涼風が吹き込んで来る。ビルの間から僅かに見える海が、美しく光っている。

すっかり冷たくなつてしまつたコーヒーを啜り、誠は兄の事を考えた。

いい大学を出て、大きな会社に勤める兄。自分が、女性と結婚して子供をもうける予定などなく、日本に帰るつもりもない以上、将来、両親の世話等は兄に頼まなければなるまい。

そういう事を考えると、口には出さないが、兄には頭が上がりない。兄からすると、大学を中退して、ハワイに移り住んだ弟に期待するところは、少ないかも知れないけれど。

女性を愛せないからといって日陰者だと思い込むのは良くない、とはルームメイトでボーアフレンドのジョーモスが日々、口にする事だが、兄から来るメールに、五回に一回しか返事を書けないでいるのは、そういう理由もある。

でもまあ、と誠は思い直した。

彼に対する引け目を感じる事は、兄が悪いのではない。自分で役に立てる事があるならば、喜んでしようじゃないか。兄の事は、むしろ好きだ。

ポケットに財布と携帯電話が入つていてそれを確認し、煙草と鍵を握つて誠は部屋を出た。エレベーターで駐車場へ降りる。

誠とジョーモスの部屋は二十階建てのビルの十五階にある。ホノルル市内のマキキと呼ばれる地区にあり、誠の店があるワイキキに

も、車でせいぜい十分だ。

誠は愛車のニッサン・セントラに乗り込んだ。以前の同僚から買ったものだが、十年落ちの割には故障もなく、いつも機嫌良く走ってくれる。

市街地を東から西へ流れるベレタニア・ストリートを通り、カラカウア・アベニューに車を入れる。中央分離帯の大木が涼しげに影を落とす通りを、真っ直ぐに走る。

アラ・ワイ運河に掛かる橋を越えると、ワイキキだ。道の左右に植えられたレインボーシャワーツリーの花が柔らかに揺れ、華やかな街が目の前に開けてくる。

シャワーツリーの形は、日本の藤に似ていないこともない。小さな花が沢山ふさのように連なつて固まりになつていて、但し花の色は黄色やピンクだし、一つのふさに違つた色の花がついている。

ツル科の藤と違つて木が枝を広げてるので、藤とは全く印象が異なる。明るい色のふさが風に揺れている様は、花の塊が降つているようにも見え、シャワーツリーという名はそこから来ているのだと思わせる。

今日もその明るい色が、青い空を背景に踊っている。

第一章・第一話 「ショップ」

しばらくカラカウア・アベニユーを走って左折し、もう一度左折して駐車場に停める。

誠は車をロックして空を仰いだ。蒸し暑い。

日本の蒸し暑さとは比較にもならないけれど、三年もいるとハイの快適の方に体が馴れてくる。

冷房の効いた店内に入るまでの辛抱だと、誠は店へ急いだ。店の従業員出入り口の正面には、四段の短い階段があつて、シフト前のセールスや休憩を取る者の憩いの場になつている。

誠が階段まで辿り着くと、先にトレイシーが来て「コーヒー・ショップのアイス・ラテを飲んでいた。トレイシーは日系一世の女の子だ。誠と同じ二十四歳なのも手伝つて、仲良くしている。

「はい、あんたの分。今日も忙しいかな？」

足元で汗をかいていた、小さいアイスコーヒーを差し出して、トレイシーが挨拶代わりに言つた。誠はありがたく受け取り、財布から紙幣を引き抜いた。

「週明けまではな。何でつたつて「ゴールデン・ウイークだからさ」

日本人観光客を目標とする業界は日本のカレンダーにも敏感だ。ブランド店や旅行業者にとって、「ゴールデン・ウイーク」は一種の行事だ。

「忙しいのはいいの。誰と同じフロアになるかつてのが問題なの」
毎週変わるスケジュールと同じく、この店では毎日担当フロアが変わる。

一階はメンズと靴に香水、二階はレディースとアクセサリーという振り分けになつていて、日によつて一階が二階に分けられる。

同僚達のほとんどは気のいい連中だが、中には必要以上に成績に拘る者もいて、フロアであざとい真似をすることもよくある。そういう同僚と一緒にになると、ストレスが溜まるとトレイシーは言つて

いるのだ。

「ところどきトレイシー、今日、珍しく兄貴から電話があつたんだよ」

トレイシーは勿論、誠の性向を快く受け入れている。頭の上がらない兄がいる事も、話してあつた。

「へえ、珍しいね。お兄さん何て？」

「それが、妙な事を頼まれちまつて」

依頼の内容は複雑ではない。誠が説明をするとトレイシーは眉を顰めた。

「一ヶ月つていうのは、普通じゃないわ」

そうだろう、と誠が口に出す前に、通路を来る足音がして、アビーと君代が連れ立つて現れた。

「出来る事あつたら、言つてね。まず、ジョームスにアドバイスをもらつたらいいよ」

小さい声で早口にそつ言つと、トレイシーは今来た二人と話し始めた。どこぞこの店がバーゲンを始めるようだから一緒に行こう、といった女子同士の話だ。

急に従業員入り口のドアが、内側から乱暴に開いた。

まだタイムカードを押すのには時間があると思っていたのに、ドアから顔を覗かせたマネージャーのポールが、中に入るよう言つ。店内がとんでもなく混雑しているらしい。普段は朝のシフトと夜のシフトのそれぞれが始まる前に、ミーティングがあるので、今日はそれどころではないようだ。

店の中は確かに大変な賑わいだつた。欲しい商品は決まつていてるのに、店員を上手く掴まえられずに困つている客が大勢いる。

大慌てで一階のロッカールームに入り、自分用の小さいロッカーに携帯電話や鍵を入れてフロアに出た。すかさず客に呼び止められる。日本人の中年男性だつた。

昨日はゴルフにでも行ったのだろう。両腕は日焼けで真っ赤になつているが、右手だけが可笑いくらい真っ白だ。彼は革のハンド

バッグを指差した。

「これ、色はこれだけ？」

人気のモデルだ。フロアにはピンクとシルバーの一色しか展示されていないが、黒と水色もある。本来ならキャッシュシャーのブースへ行つて、自分の担当フロアを確認するのが先なのだけれど、客を待たせる訳にもいかない。

「他に黒と水色がございます。御覧になりますか」

「黒と水色か、このバッグは人気があるんでしょ？」

「はい、それはもう、色も形も可愛いですし、シンプルなデザインですから、どんなお洋服にも合わせやすいんですよ。お土産ですか？」
本来なら聞くまでもない質問だ。中年男性がハンドバッグを自用に買う訳がない。ただこの後「お幾つ位の方で？」、「身長は？」などというセールス・トークに繋げる為には必要なのだ。

ところがこの客には必要なかつた。

「うん、そう。じゃあね、全部一個ずつ頂戴」

内心快哉を叫びながら、誠はにっこり微笑んだ。料金の高いゴールデン・ウイークにハワイに来るだけあって、この時期は即決で大きい金額を使う客が多い。

「一色ずつ、合計四つで宜しいですか？」

念のため確認すると、客は軽く「うん」と頷いた。値段はディスプレイの前に表示してある。一つ七百ドル。四つで一千八百ドルだ。そういう額の金をさらつと使える人間は、あまりいないのだろうが、あまりいない人間がよく来るのがブランド店だ。

「かさばるの嫌だから、包装は小さめにね」

恭しくカードを受け取り、丁寧に返事をして、誠は商品のプライスカードとクレジットカードをキャッシュ・ラップと呼ばれるブースに持つて行つた。

中では会計専門のキャッシュシャー、アンジョラがおそろしい勢いでコンピューターのキイを叩いている。

プライスカードの列に大汗を搔いているアンジョラを邪魔しない

ように、キャッシュ・ラップを出る時、入って来ようとしたジョージとぶつかりそうになった。

ジョージも誠と同じセールスだ。日本人と白人のハーフで、誠より一つ年上の彼ともよく飲みに行く。今日は誠と同じシフトの筈だから、今出勤したのだとすれば遅刻した訳だ。

「よう兄弟、調子はどうだい？」

Eh, bro. How's it? 本土から来たアメリカ人の客相手には、アクセントのない英語を使うくせに、同僚や友人と話す時のジョージはかなり地元のアクセントがきつい。ジョージの右手を叩くように握つて、誠も挨拶を返した。

「絶好調だ。あんた、今来たのかい？」

「馬鹿言え、俺は遅刻なんかしねえ。下で密に捕まつてたのさ。あの野郎、あれこれ試着した上で『考えておく』と来たぜ。俺は今日二階担当だつてのに、とんだ時間の無駄だつた」

セールスの仕事が長く、少々の事では笑顔を崩さないジョージは、実は口が悪い。客が帰った後なら何を言おうが勝手というのが彼の持論で、しかも彼の喋り方は何処か憎めない処があつて、誠はしおつちゅう笑わされている。

半年前にこの会社に勤め始めた際、ジョージと口論になつた事があつた。

誠が同性愛者だと知つたジョージが「俺の尻を狙うのはやめてくれ」と、からかつたのが原因だった。

「うぬぼれが過ぎないか？ それともあんたは、好みじゃない女の子にも一々そつやつて、下らない断りを入れてるのかな」

憤然と言い返したのが、却つて良かつたようだ。不特定多数を相手にしない所にも、ジョージは好感を持つたらしく、以来親しく付き合つようになった。

「あんた達、お喋りしてないで仕事しなさいよ」

ブースの中から飛んで来たアンジェラの声に首を竦め、誠とジョージはフロアに散つた。

五時からが夕食休憩だった。

近所のハンバーガーショップで、トレイシーの言葉に従つて誠はジェームスに電話をした。

事務所は一応五時で閉まる事になつてゐるが、彼がその時間に退勤できた例はない。彼の仕事は弁護士だ。離婚と家庭問題を専門に扱う法律事務所に勤めている。

事務所の番号ではなく、携帯電話にかけると奇跡的に繋がつた。

「どうした？ 何かあつた？」

声が緊張しているのは、日頃誠が、仕事中に電話する事がないせいだろう。兄からの電話を受けた誠と、同じリアクションだ。

簡単に兄からの頼まれ事について説明し、助言を求めるが、彼はまず Power of Attorney がなければ話にならないと言つ。

誠が兄と話しながら思い浮かべた、公証人の前でサインする正式な委任状だ。

「それにしたつて本人の代理じゃなくて、家族の代理だから効力は限られるけどね」

「アメリカの書類だから、日本じゃ難しいんじゃないのか？」

「大使館や領事館で公証してくれるだろう。調べて教えてやればいいさ」

政府の公館が、そういうサービスをしているとは知らなかつた。誠は礼を言つて電話を切り上げ、携帯電話からインターネットで検索してみた。確かに、東京にある在日本アメリカ大使館や、地方のアメリカ総領事館で、そういうサービスを提供しているようだ。

親切な事に、ダウンロード用のフォームまである。誠は早速その旨を簡単に兄にメールした。兄の住む町から、在大阪アメリカ総領事館まではそれほどの距離ではない。

一時間の夕食休憩を挟んだ後も、誠は良い客に当たり続け、十一時に店が閉まつた時、誠は大まかな計算でもハ千ドルは売つていた。ワイキキのブランド店やブティックの閉店時間は、大概十時か十一時だ。ライバルのアラモアナ・ショッピングセンターが九時で閉まるせいもあるし、夕食後に異国情緒溢れる街をそぞろ歩きする人々の、衝動買いも期待しているだろう。

ディスプレイの小物が盗まれていなかチエックしたり、営業時間中に散らかしたストックルームを片付けたりする閉店作業中に、ジョージが誠の肩を叩いた。

「何か食つて帰ろうぜ、お前の奢りで」

誠とは逆に、ジョージは売り上げが奮わなかつた。

トレイシーも誘つて店の近所のバーでピザを摘要、誠が帰宅したのは一時近かつた。ジェームスは眠つてしまつてゐる。

彼は早寝早起きの健康第一人間だ。夏が近くなつて、島の南側、ホノルル側の波が高くなつて來たので、時々仕事前にサーフィンに行くという恐るべき事をする。

ジョームスは三十一歳で、弁護士としては駆け出しの部類らしいけれど、收入は誠と比べ物にならない。2ベッドルームのアパートの家賃千七百ドルの内、千百ドルを払つても大した負担にはなつていない。

二つあるベッドルームの片方を彼の書斎にして、もう一つに一人で寝ているから、誠はそれで良かうと思つてゐる。

ベランダに出て煙草を一本吸つた後、誠は音を立てないようにしてジーモスの書斎に入った。自分のノートブックパソコンがそこにある。

兄からの返信が入つていた。

塩田綾の住所と電話番号、在籍している学校の名前なども書いてある。それと早速手紙を作成して、院長からサインをもらつたとあり、又、連休が飛び石なのを利用して、大阪のアメリカ総領事館まで行く予定だともあつた。

それ程に心配ならば、なぜ院長自ら、あるいは家族の誰かが直接ハワイに来ないのだろうか。いくら海外といつても、兄の話に依ると大きな病院らしいし、経済的には何の問題もなくガイドでも雇つて彼女が無事かどうか確認出来るだろう。

一瞬不愉快な気分に陥りかけたので、誠は頭を一振りした。
やると決めたのだから、先方の事情はともかく、最低限の事をえすればよい。誠の目的は兄の顔を立てる事だ。

最初に添付されたファイルが、院長からの手紙だつた。昼間誠が伝えた通りの文面で、桜井誠は依頼人、塩田勝一の正式な代理であるので、勝一の娘、綾に關しての情報を与えて構わない。

綾のプライバシー、私物に關わる事を許可されており、これに協力する者を告訴する事は決してない、といったものだ。

次の添付のファイルを開けると、誠は口笛を吹きそうになつた。
ハワイに来る直前に撮つたものとあつたが、塩田綾は美人だつた。肩よりも少し長い髪はサイドにレイヤーが入つて、裾には僅かにウエーブがかかつてゐる。

はつきりした二重の瞳が印象的だ。通つた鼻筋も嫌味過ぎる程ではない。撮影時は三十歳で現在は三十一歳だそうだが、二十代後半に見える。

自分が異性愛者ならば、鼻息も荒く彼女を捜したかもしれないと、誠はおかしくなつた。
ストレート

メールや写真をプリントアウトして、とりあえず出来る事はなくなつたので、誠はキッチンへ行つてグラスにウイスキーを注ぎ氷を落とした。

リビングルームへ戻つてマットレスを床に敷き、その上に座る。神経質なジエームスを起こさない為に、遅く帰つた夜はそうして

眠る事になつてゐる。ウイスキーを舐めながら、塩田綾の学校とアパートのどちらを先にするか考えた。

考えている内に眠気が差して来て、どうするか決める前に誠はマットレスに沈んだ。

翌朝はけたたましい日覚まし時計に叩き起された。朦朧として起き上ると、針は十一時を示している。昨夜からの懸案事項として、塩田綾の事はちゃんと覚えている。

シャワーを使いながら、誠はまず彼女のアパートに行つてみようと思い立つた。簡単に部屋へ入れる訳はないし、当然その前に電話をかけなくてはならない。

万が一にでも電話が通じれば、御家族に連絡を入れて下さいと伝えてお役御免だ。

濡れた体を拭くのもそこそこに、まず自宅にかけてみた。予想通り留守番電話になつてはいたけれども、塩田綾の声を聞く事は出来た。英語と日本語の両方で、英語の発音はあまり宜しくない。

昨晩見た写真から想像出来るような、高めの声で甘い喋り方だった。

念のために携帯電話にもかけると、呼び出し音も鳴らずに留守番電話センターに直接つながつた。こちらのメッセージは電話会社のものを使っている。

僅かに失望しながらカウチに腰を下ろし、プリントアウトしたメールを読み返す。

彼女の住所の欄を見て、誠は眉を吊り上げた。昨晩は気が付かなかつたけれど、わざわざビルの名前が明記してある。塩田家は思った以上に裕福なのだ。

塩田綾の住まいは、ワイキキの東端近くにそびえる高級コンドミニアムだった。昨晩と同じように、なぜ自分なんかに「様子を見る」役が廻つて来たものかと頭を捻りはしたもの、誠は深く考へないようにして、出掛ける準備をした。

位置からすると、出勤前に寄ると丁度いいだろう。

若干蒸し暑い感じも残っているが、仕事や調べ物など放り出してビーチに行きたいような上天気だ。

アラモアナ・ショッピングセンターの山側を通り、カピオラニ・ブールバードをのんびり走り、ホノルル市が巨額の費用を投じて建てたコンベンションセンターの角を曲がってカラカウア・アベニューに入る。

塩田綾の住んでいるコンドミニアムはワイキキに入つてすぐ、カラカウア・アベニューから細い道に折れた所にあつた。四十階程の巨大コンドミニアムだ。

完全居住型なのが、ビルの一階と二階に幾つかレストラン等の店舗が入つてるので、駐車場内にきちんとビジター用のスペースがあるのは有り難かつた。

車を停めた階を三階と確認して、誠はエレベーターで一階に降りた。店舗が並ぶフロアの反対側に住人用のエントランスがあり、インターホンが設置してある。

誠は無駄かと思いつつも、塩田綾の部屋にかけてみた。答えはない。

次なる手段として管理人室を見付けなければならない。誠が住んでいる地味なアパートと違つて、管理人室はすぐに分かる場所はないようだ。

偶々通りかかった警備員に場所を尋ねた。

「ここに住みたいのかい？」

第一章・第四話 「コンペルアム」

退屈していたのか、若い警備員は誠が質問に答える前に、せりふ質問を投げて来た。

日本人だね、その格好は学生じゃないね、何の仕事だい、給料はいいのかい、この家賃は高いよ、基本は分譲型だから、まさか買おうってんじゃないよね。

ハワイアンかサモアンと思しき彼は、やたらとここにしているので、誠もつい釣り込まれて笑った。

「ここに住むなんて、とんでもない話だ。俺の給料じゃとても。ここに住んでる人を、探しに来たんだ」

肩を竦めて見せると、彼は深々と頷いた。

「こんな所、住むもんじゃねえって。高い上に、あんた、出んだよ。ホーンテッドという単語に誠はぎょっとしたが、彼は笑顔のままで続けた。

「夜中に見回りしてつと、声が聞こえたり変な影が見えたり、な。こないだなんか、でつけハワイアンの男が槍持つて歩いてたつけ」「怖くないのかい？」

「俺あ、ハワイアンだもの。ハワイアンの幽霊は怖くねえ。それにあんた、幽霊が出るビルなんか掃いて捨てる程あるしよ。ま、警察官の試験に受かるまでの辛抱よ」

あつけらかんと笑う彼に好感を感じて、誠は手短に事情を説明した。ついでに昨夜プリントアウトした綾の写真も見せた。

「ああ、そりや親御さんは心配だね。どれ、おや別嬪さんだ、な。ううん、一度か二度見かけた事があつたかもしんねえ。俺は分かんねえが、マネージャーなら分かるかも、な。よし、一緒にマネージャーのオフィスへ行こうぜ」

彼の名前はキモといった。

紹介されたマネージャーは、アジア系の初老の男性だった。誠が

説明をするまでもなく、キモが横から早口で伝えてくれた。

「て訳だからよ。ロナルド、助けてあげなよ」

考え込む風にしたマネージャーに、誠は素早くPDFファイルの手紙を示した。

「怪しい者じやないんです。まだ塩田さんの部屋に入りたい訳でもないですし。ただ部屋は賃貸だったと聞いていますが、どこの不動産会社が分かりますか？ それと最近、彼女を見かけた事はありますか？」

そう尋ねて、誠は取つて置きのセールス・スマイルを浮かべて見せた。威圧の利かない外見でこの笑顔を浮かべると、少なくとも相手の警戒心だけは削ぐ、とジョージに教えてもらつた。

それでもマネージャーは、渋い顔を崩さない。

「この人は住人のお父さん？ もしも非常時の連絡先に、名前が入つていれば……」

言いながらデスクの後ろから、台帳を引っ張り出した。

「ええっと、3102の塩田さんの非常時連絡先は、学校だね。どこの学校か知つてるんなら、そこに行つて聞いてみたらどうだい？ 申し訳ないが、最近見かけたかどうかも答えられないね」

首を振りながら言つたが、決して冷たい口ぶりではない。マネージャーの懸念も分かる。

非常時の連絡先に父親の名前がなく、手紙も正式ではない以上、誠がただのストーカーでないと証明できるものがない。始めから期待していなかつた分、失望もしなかつた。

「学校で聞いてみます」

軽く答えると、マネージャーは腕を組んで言つた。

「変な事を言つようだけど、彼女が部屋で亡くなつているって事だけは、心配しなくていいよ。そんな事だったら、とっくに匂いがして、近所から苦情が出てる筈だからね」

そうですね、と言いながらも誠は、その可能性を考えていなかつた自分に呆れた。

人が亡くなつたとして、近所が匂いで気が付き、部屋を開けてみて騒ぎになり、不動産会社から日本に連絡が入るのに、一ヶ月は掛かるまいと思つたからかもしかつた。

それまで黙つていたキモがふいに口を開いた。

「そういう事があったのかい？」

「このビルじゃないよ。私が前に勤めていたビルだが、あれは参つた。独り暮らしのお年寄りで、氣の毒だつた。本当に氣の毒だつたが、本当に参つた」

分かるだろう、といつ口調でマネージャーはまた首を振つた。この人の癖かもしけない。

当面、このコンドミニアムで拾える情報はこんなものだらうと判断して、誠は切り上げる事にした。一人に丁寧に礼を言い、万一、塩田綾を見かけたら日本に連絡するように伝える事を頼んだ。

まだ話したそうなキモと駐車場で別れてから、出勤時間が迫つている事に気が付いた。

店は昨日と同じ様な混雑振りだつた。

しかし、今日は一階担当になつた誠に、昨日ほどのツキはなく、お陰で塩田綾について考えを巡らす余裕もあつた。

彼女がどんな性格かまでは、兄のメールにはなかつたけれど、ボーライフレンドが出来て彼の所へ入り浸りになり、実家からの連絡と擦れ違ひ続けている、というのはありそうな話だ。

思い返してみれば、依頼の電話で「我が儘で気まぐれな所がある」と、彼女の父親の評を聞いた。何か腹の立つ事でもあつて、わざと連絡を取らないでいるのかもしけれない。

実は両親の方も、それが分かつていてから敢えて放置しておいたというのは考えられる。

電話は当然、留守番電話にしたままなのだろうじ、インターネットにしても、一人暮らしの女性の事だ。誰かの訪問の予定がなければ、無視するだらう。

もしそういう気楽な状態でないのなら、何かのトラブルに巻き込

まれた可能性が高い。とすれば、誠の手に負える問題ではない。

アパートを当たつた次は、学校に行ってみなくてはならないが、明日は土曜で、月曜まで出来る事はなさそうだ。

そこまで考えて、誠は塩田綾について考えるのを止めた。
何かの理由でわざと彼女が両親と連絡を絶つてゐるところのが、至極妥当な所だと思えたからだ。

彼女について考えるのを止めるに、あとは仕事の後にジエームスと過ごす時間の事しか頭に残らなかつた。

ジエームスと知り合つたのは、同性愛者が集うバーだ。彼の控え目で丁寧な物腰と、すぐにベッドに誘わない所を誠は気に入つた。もつとも、後でジエームスが告白した所によると「本当はすぐにも誘いたかった。でも日本人は初めてだったし、すぐに寝て、すぐにつながる。でも日本人は初めてだったから、慎重になつたんだよ」だそうだ。
女の子じやあるまいし、とは思つけれど、そんな風に気を遣つてくれる彼が好きだ。

身長は誠よりも三、四センチ高い程度だから、百八十センチくらいだが、体重は優に十キロ以上重いだろう。茶色の髪で瞳も茶色。整つた顔立ちといふよりは、味のある顔だと誠は常々思つてゐる。閉店後、スーパーバイザーのティムが「一杯やつてかないか」と誘つて來たが、誠は丁寧に辞退した。

アパートに帰ると、ジエームスは大量の資料に囲まれて誠の帰りを待つてゐた。

「お帰り、腹減つてゐる? 一応夜食を用意してあるけど」

ナイト・シフトの夕食休憩は五時から六時だ。店が終わつて閉店作業の終わる十一時半から十二時には、すっかり空腹になつてしまふ。

「寝る前に食べると太つちゃう」とトレイサーの言で、誠も気を付けなければと思うのだが、空きつ腹を抱えて眠るのは辛い。まして仕事の後のビールの魅力には抗い難い。

「寄り道せずに帰つたからね、飢え死にしそうだよ

急いで着替えを済ませてキッキンを覗くと、ジェームスがチキンを温めなおしていた。

彼の自慢のショーケ・チキンだ。ハワイ名物、プレートランチのメニューで最もポピュラーなこの料理はジェームスの自慢だ。どういう手順で、どういう調味料を使っているのか、料理の下手な誠は分からぬが、「俺のチキンはオアフ島一美味しい」と彼が得意気なのも、あながち嘘ではない。

続いてジェームスは、冷蔵庫からボケを出した。地元でアヒと呼ばれる鮪の肉を犀の目に切り、玉葱やオゴという海藻と一緒に、醤油をベースにしたたれに漬けて食べる。このたれもジェームスは一家言持つていて。

お得意の料理を一品も作った所を見ると、何か良いことがあったに違いない。誠はビールにも手を伸ばした。

「何があつたんだい？」

リビングルームのカウチに座つて、やわらかいチキンを口一杯に頬張りながら、誠は尋ねた。

「例のケースが解決した、と言いたい所なんだが、実は法廷で争う事になつた。また当分忙しくなりそうだからさ。君の好物で前払い」外の分野の訴訟問題もそうなのだろうが、離婚問題、子供の親権を巡る争いが法廷に持ち込まれる場合は大抵長引く。依頼人からのプレッシャーも大きく、ジェームスのような駆け出しが、一回々々が大事な勝負だ。

「ああそう、仕方がないね。負けねえでよ」

「君の恋人は無敵だ。ところで昨日のPower of Attorney の事だけど」

誠が、コンドミニアムに行つて来た経緯を、自分の推察も含めて話すと、ジーモスは少し眉を顰めた。

「本当に君の思つてゐる通りならいいが、そうでないようなら関わり合いになつちゃいけない」

「俺が首を突つ込んで危ないような事に、日本人の女の子が関わつ

てる訳がないじゃないか

誠がハワイに来たのは三年前ほどだ。暫く語学学校へ通つてから、

働き出した。

笑い飛ばした誠を、ジェームスは真剣な声で窘めた。

「君はまだ三年しかハワイにいない。確かに本土よりも治安が良いし、犯罪の質もひどくないが、狭い島なんだ。色々な人間が、肩をぶつけ合つて生きてる。それだけに人間同士で、思わぬ摩擦が出来るんだ」

忠告には素直に頷いたものの、誠の頭の中には、この後ジェームスを押し倒すことしかなかつた。

第一章・第五話 「プレッシャー」

週末の一日前は塩田綾に関する調査は何も出来なかつた。

誠は彼女の事を頭から追いやり、ひたすらセールスの成績を上げる事に努めた。

普段の土日は、観光客の出発と到着日になる事が多いため、比較的暇だ。日本へ出発する便是午前中に集中しているから、出発日の買い物は難しいし、また到着したその日に、高価な買い物をする客も少ない。

しかしこの週末は「ゴールデン・ウイーク」とあって、いつもとは違ひ、セールス達は接客に追われた。誠は一日ともナイト・シフトに入つたが、日曜の夕食休憩の際に、思い立つてスケジュール表を覗くと、翌日が休みとあつた。時々、こういう事がある。

帰宅後、メールを確認すると兄からのメールで、先日と同様 PDFファイルで正式な委任状、Power of Attorney が添付されていた。

翌日、せつかくの休日だから遅寝を楽しもうという誠の日論見は、午前九時半には破られた。インターのベルに朦朧としながら起き上がりて行くと、宅配便の配達人が届け物だと言つ。国際速達便で送られて来た小包は、兄からだつた。

受け取りのサインをしながら、思わず「早いな」と日本語が出た。中に入つていた数冊の推理小説と地方の名菓は兄の心遣いで、茶封筒に入った手紙と写真が本題だつた。

木曜にPDFで送られて来た手紙の原物に、役所で発行した実印証明書が添付されている。委任状がPDFでも届いた以上は、こちらのオリジナルがあつても、役に立つ事は少なそうだ。

写真は一般的なサイズの物が三枚。いずれも塩田綾の顔がはつき

り分かるものだ。綾の父親からの手紙はなかった。もつとも、貰つても誠は何と返事をしたものか分からぬ。

同封されていた兄の手紙には、「そういう訳なので一つ宜しく」という意味の事が書いてあつた。

寝起きの機嫌の悪さで誠は、「一つも一つもあるもんかい」と独りごちたが、追伸として「経費とお礼を、別便のマネーオーダーで送りました」と書いてあつて、誠は気が重くなつた。

今は円が高いとはいへ、塩田綾の父親から出た物ならばともかく、先に電話で話した通り、兄が自腹を切つたのだとすれば受け取りたくなかった。大きな金額でない事を、祈るしかない。

誠はもう一本煙草を灰にした後立ち上がつた。

すっかり目が覚めてしまつた今は、出来る限り早く塩田綾の件を片付けるべく何かしようと思つた。昨夜のメールと言い、尻を叩きまくられていよいよ氣がする。

塩田綾の学校名は覚えていた。誠が語学学校に通つていた頃、名前を聞いたことがあつた。インターネットで検索すると、すぐに立派なウェブサイトが見つかった。場所は、アラモアナ・ショッピングセンターに近いビジネス・ビルだ。

シャワーを使い、軽い食事をして誠はアパートを出た。

ビジネス・ビルという事は有料駐車場があるには違ひないが、僅かでも金を使う事が業腹に思えて、誠はアラモアナ・ショッピングセンターに車を停めた。

少し歩いてカピオラニ・ブルバードに出る途中、強い日射しに照り付けられて、誠は舌打ちした。こんな事ならビーチへ行く支度をしてくれば良かつた。

しかし、カピオラニ・ブルバードを歩く時には、日射しは気にならなかつた。広い道路の両脇には、等間隔で大きな木が植えられている。

両面合わせて六車線の広い道路を、緑のトンネルのようを感じさせてしまう木は、モンキーポッドツリーという。正確な学名や種類

は知らない。ただ土地の人達はそう呼んでいる。

昔何かの本で見た、バオバブの木にも似ていると思う。

ワイキキまで歩いても大した距離ではないほど近いのに、南国の中という雰囲気は同じでも、カピオラニ・ブルバードの方が静かな感じがするのは、この木のせいかもしれない。

目指すビルのエントランスの前には植え込みやベンチがあり、一日で学生と分かるアジア人達が談笑したり煙草を吸つたりしていた。エレベーターで六階に上がる。

プレートの名前を確かめ、木製のまだ新しい感じのするドアを開けると、思ったより広く瀟洒な受付になっていた。白いカーペットに、身の丈程もあるベンジャミンの鉢植えが置かれ、隅にはソファ一まで置いてある。

タンクトップやTシャツの学生が何人かうろつろしていた。

誠はドアと同様に新しい、木製のカウンターに近寄った。カウンターの中では、事務員の女性が何か書いていたが、気配を察して顔を上げた。おそらく四十代前半のその顔を見て、誠は日本人だな、と思った。

はつきりは説明出来ないが、化粧の仕方や服装が、日系のアメリカ人や外のアジア人とは違うのだ。

「Hello. How may I help you?」

にっこり笑つて言つた言葉には、やはり日本語のアクセントがあった。誠も笑顔を返し、日本語で尋ねた。

「日本語でいいですか？」

「あら、日本の方？ 入学案内ですか？ 今なら入学金割引期間中ですから、お得ですよ」

思わず見習いたくなるような笑顔で、彼女は言った。

日本の景気がなかなか回復しないせいで、留学生も減つていると聞いている。こういった学位の取れない語学学校は、生徒の確保が大変だらう。事務員も外部に良い印象を与える、生徒を獲得すべく頑張っているのかもしねれない。

誠が用件を切り出そうとした時、カウンターに若い日本人の女の子が駆け寄つて来た。「コウコさん」と事務員の女性を呼ぶ。

「あたし、銀行のカード失くしちゃつて。どうしよう?」

「コウコと呼ばれた事務員が、ちらりと誠の方を見たので、誠は気を利かせた。

「どうぞ彼の方をお先に。時間はありますから」

すみませんと事務員は頭を下げる、ソファーの方に掌を向けた。

「よろしかつたら、お座りになつて下さいね」

すぐに銀行に連絡するように、と言う事務員に、学生は「何て言つていいか分かんない」とすがつた。嫌な顔一つせずに電話をかけ始めた事務員を見て、誠は感心もしたし、幸運だとも思った。

これ程面倒見のいい人なら、塩田綾の事を尋ねてもそつなく突つ撥ねられまい。

十分程して女の子の用件が終わると、彼女は誠を呼んだ。

「すみません、お待たせしてしまつて。それで御用件は何でしょか?」

「まずこれを読んで貰えますか? 何かのセールスじゃありませんから、御心配なく」

誠は脇に抱えていた茶封筒から、届いたばかりの委任状のプリントアウトを出した。委任状に記載の人物が、自分に間違いない事を示す為に、ハワイ州の運転免許証も差し出す。

長い文章ではないので、彼女が読み終わるのに時間は掛からなかつた。

「どういう事なんでしょう?」

大きく見開かれた目が、不安気だ。

「塩田さんは、こちらに在籍中の筈なんですよ。ところが一ヶ月も連絡が取れないので、ご両親が心配して、僕に様子を見るように言って来たんです。塩田さん、最近学校に来ていますか?」

「塩田綾って、あの綾さんの事かしら?」

彼女が少し首を傾げたので、すかさず誠は写真をカウンターに置

いた。「『Jの人です』

「あらわつよ。綾さんどうしきやつたんですか？」

「それは、僕が聞きたい事なんですよ」

苦笑氣味に誠が答えると、事務員も釣られて少し笑つた。

「そうでしたね。ところで綾さんとはどういつ御関係なんですか？」

一瞬迷つた末、誠は正直に、自分の兄が塩田綾の父と知り合いだと言つた。

「ですから僕は、塩田さんにお会いした事はないんですが、お元気だと分かれればお会いする必要もないんです。コウコさんとおっしゃいましたよね、『綾さん』と呼ぶ位だから、親しいんじゃありませんか？」

出来るだけ真摯に誠は頼んでみた。彼女は一瞬眼球を上に向け、小さく溜息を吐いてから誠に向き直つた。

その動作に、誠は何か嫌な予感がした。

「来てないですよ」

微笑みをすっかり消して、彼女は小さい声で言つた。
「彼女が入校したのは、ええと、去年の夏だったと思うんですけど、最初の頃はそりやあ真面目に、毎日ちゃんと来てました。仲良しの子もいましたしね。よく授業の前後に、ここでお喋りしたんです。だから私も名前を聞いて、すぐ綾さんだと分かつたんですけど」
塩田綾が学校にあまり来ていなかつたとする、彼女が元気でいるかどうか確認する事は、非常に難しくなる。まさか「コンドミニアムの前に張り込む訳には行くまい。

落胆しながらも、誠は聞くだけの事は聞いておこうと思つた。

「最初の頃というのは、どれ位の期間ですか？」

「三ヶ月位かしら。その後は時々、一週間に一度とか、二週間も見かけなかつた事がありましたね。最近は全然見ていません」

一週間に一度では、学校に通つているとは言えないのではないか。案外さらりと言つてのける事務員に、誠は首を傾げて尋ねた。

「学校側では、出席状況によつて生徒に連絡するとか、出席を促すとこう事はしないんですか？」

事務員はもう一度苦笑した。

「しませんね。普通の大学や専門学校でも、出席するよう学生に連絡することは少ないのでしょう？　学期の終わりに、各教員から提出される成績表に名前がなければ、修了証明書を出しませんし、規定を満たしていなければ、次の学期に登録出来ず、つまり学校に在籍出来ないことになつています」

もつとも過ぎる説明に、誠は頷くしか出来ない。事務員は言葉を継いだ。

「遊びたいだけの子もいますけど、真面目に勉強している子が大半です。実際うちの教員は、優秀な人ばかりを揃えていますし。本当

にやる気のある子しか授業には来ないので、内容の濃い授業になるんです。そうそう、以前、綾さんと仲良しだった子、今はSHに行つてる筈です」

SHといつのはユニバーシティ・オブ・ハワイの略で、ハワイ大学の事だ。この州立の大学に入るのには、かなり高い語学力が要求されると聞いた。

「そのお友達は、まだ綾さんと連絡取つているでしょうか？」

「多分。外には思い当たらないんです。浅井友子さんっていう子で、彼女の連絡先は、まだファイルに残つてます。規則で桜井さんに教える事は出来ませんが、私が連絡してみますよ。桜井さんの連絡先を頂けます？」

思った通り、この事務員は面倒見がいい。

誠は慌てて財布を取り出した。場違いは否めないが、会社で作つてくれた名刺が入つていて、ペンを借りて、名刺の裏に自宅と携帯電話の番号を書き付けながら、質問を重ねた。

コンドミニアムに関して尋ねると、この学校の生徒はほぼ一括して、近所のローンウェル不動産に周旋していると言つ。誠は別の名刺に、その名前を書き付けた。

「あの、塩田さんってどんな人ですか？ 僕は会つていないので、聞いておきたいんです」

「美人、なのは写真を見れば分かりますよね。人当たりのいい、優しい人ですよ。入校したての時は、ちょっと影があるかな、と思いましたけど、すぐに明るくなつて。でもこの前来た時は、瘦せちゃつてましたね。この前つて、一月以上前でしたけど。もし良かつたら、奥のスナックルームにいる子達に聞いてみて下さい。あの子達、授業は出なくても、ここに来て友達とお喋りするのは大好きなんですね。最近、綾さんをどこかで見た子がいるかも」

事務員は左手の廊下を指差した。

「ここの突き当たりを右です」

言われた通りに行くと、突き当たりを曲がる前から、賑やかな笑

い声が聞こえてきた。スナックルームという名の談話室は十畳ほどで、Ｌ字型のソファーには、いずれも二十代前半と見える五人の女の子が腰を下ろし、日本語と英語、中国語を取り混ぜて喋っていた。職業柄、見知らぬ若い女性と話す事は馴れている。誠は例のセールス・スマイルを浮かべながら近付いた。

女の子の内二人が台湾人だった。日本語と英語で誠が簡単に説明をして写真を見せる。彼女達は興味深そうに写真を手に取り、ピンクのＴシャツを着た一人が声を上げた。

「あたしこの人知ってるよ。クラブで時々見かけるもん。この学校の人だつたんだ」

早くも手応えがあつたのは喜ばしいが、こういう時、誠は実感する。本当にホノルルは狭い。新宿や渋谷ではこうはいかない。彼女の挙げたナイトクラブの名前を頭に叩き込んで、誠は最近見たのはいつか尋ねた。

「いつだつたかなあ、覚えてない」

ボーグ・シユに頭を搔く、ピンクのＴシャツに、隣の白いタンクトップが、「思い出したり、また彼女見たりしたら、連絡すればいいじゃない。番号貰つておいてさ」と言つて、誠を上目遣いで見た。思い上がつているつもりはないけれど、店でも時々こういう事がある。

若手俳優のＧに似ているなどとも、しばしば言われる。思い過ごしかと思ったが、ピンクのＴシャツの反対隣に座つてているショートカットが、笑いを堪えているのが明らかだった。

「連絡はいいから、日本に連絡を入れるように伝えてくれるかな?」ピンクのＴシャツが、「いいよー、塩田綾さんね」と承諾したのをしおに、誠はスナックルームを後にした。

一步外に出るや否や、「あんた、見え見えじゃん」と、白いタンクトップをからかう声がした。

受付に戻つてカウンターの事務員に挨拶した。丁寧に礼を言つて誠に、彼女はしみじみと言つた。

「生徒さんの全員にはしてあげられませんから、私は皆のプライベートには、触れない事にしているんです。でも、こういう事があるとやっぱり心配です。綾さんに会つたら、時々でいいから学校にも来るように伝えて下さい」

もう一度礼を言つて誠はドアを潜つた。エレベーターで一階に降り、アラモアナ・ショッピングセンターに向かつて歩き出す。

歩きながら、今聞いてきた話を頭の中で纏め、誠なりに綾の状況を推理した。

まず、最初の三か月は眞面目に通学していた点は、至極当たり前だ。多分学校に来なくなつたのは、外に友人がボーイフレンドが出来たと考えられる。あまり感心出来る付き合い方では、多分ない。

おそらく出来たのはボーイフレンドだらう。年齢的な点から見て、彼女は結婚なども考え、両親に告げた際に衝突したのではないか。

両親の気に入る条件、或いは相手ではなかつた事が彼女を瘦せさせたのだろう。立腹、もしくは懊惱して、連絡を絶つてはいると誠は考えた。

ふいに昔、日本の新聞で見たことのある広告を思い出した。「綾、許す。連絡せよ」という文面が頭に浮かび、誠は可笑しくなつたが、どうもこの場合、自分が三行広告の代わりを果たさなければならないらしいと思い直してげんなりした。

さてこれからどうしようかと、時計を見ると十一時半だった。

日本時間では一日先、つまり「ゴールデン・ウイーク明けの火曜の朝、午前六時半だ。日本とハワイの時差は十九時間で、日本の夜に電話を掛けようと思うと、ハワイでは深夜になる。

塩田綾のコンドミニアムと学校へ行つた事を、兄に報告して、今後はどうして欲しいのか聞きたかった。この時間なら出勤前で、家にいる筈だ。

車の中から電話すると、兄はまだ自宅にいて、誠の報告と推察に唸り声を上げた。

「そうだな、そういう事もあるかもな。あの院長先生は保守的だか

ら、娘がハワイにずっと住みたいとか、アメリカ人と結婚したいなんて言つたら怒りそうだな

「留学はいいのかい？」

「一年間だけとせがまれたそうだ。とにかく、塩田先生に報告してみるよ。もしお前の言つたような背景があるんなら、何かほのめかすかもしれん」

「この後俺は、何をすればいい訳？ 探偵まがいの事は出来ないよ。それに偉い人だったら、外にも一杯コネがあるんじゃないのか？ そういうのを使って、もつと本式に娘さんを捜したらどうなんだろう

う

ついつい口調が、愚痴っぽくなつてしまつた。

「いや、すまん。塩田病院は、実際でかい病院なんだ。コネもあるだろうけど、この町は昔から住んでる人が多くて、皆が知り合いなんだよ。俺なんかに頼んだのは、余所者だし、二、三年で本社に戻る予定だからさ。俺に『喋るな』って言つておけば済むの。土地の人に頼んだら、塩田病院のお嬢さんが、ハワイで連絡取れない、なんて話は音速で広がつて、二十年は語り継がれるよ」

言いながらもそういう土地の習慣を、馬鹿にしている風はない。むしろ楽しんでいるようだ。

「今から院長先生に電話するよ。それで掛け直す。今日は休みかい？ あと手紙に書き忘れたんだが、お前のメール・アドレスは向こうに教えてあるから、そっちに何か連絡が入るかもしれない」

誠が曖昧に返事をしている内に、兄は電話を切つた。

やれやれと呴いて車を出す。今日はもう塩田綾の事は終わりにしたかつた。

何か指示があつたとしても、緊急でない限り明日以降にしようと決めて、アパートに戻つた。まだ十一時だ。午後はビーチに行って、送つて貰つた本でも読もう。

古いバックパックに日焼け止めや本を突っ込んでいると、電話が鳴つた。兄だ。

「おい、院長先生は、腹立てられるような事はないみたいだぞ。学校の事、柔らかく言つたせいか、それはそんなに驚いていなかつたけど、とにかく何としても彼女を見付けて、連絡を入れさせてくれつても。必要なら、コンドミニアムの部屋に踏み込んでも構わないそうだ」

誠は院長先生とやらの頭の構造がよく理解出来なかつた。

そんな風に他人に、娘のプライバシーを見せるのも厭わない程心配なら、なぜ自分でハワイに来ないのだ。

兄を相手に抗弁しても仕方がないし、一度引き受けてしまつたもののを撤回するのは気が引けたので、誠は短く「分かったよ」とだけ言つた。

付け足しのつもりで、ハワイにも興信所はあるよと言つておいた。

予定を変えるつもりは無かつたので、誠はバックパックを抱んでアパートを出た。いつも行くビーチは決まっている。

平日のアラモアナ・ビーチパークは程良く空いていた。

ちょうど干潮時で、浜辺から七、八十メートル先のリーフが、海上に顔を出している。手前の波打ち際の水はエメラルドグリーンだが、その先は藍色に光っている。リーフを越えた沖の方には高めの波が立ち、サーフィンを楽しむ人の姿も見える。

普段は狭さにうんざりする事もあるハワイ、というかオアフ島だが、こういう景色がいつでも味わえる場所は、世界にもそつ多くあるまい。

珊瑚礁までゆっくり泳いでから浜辺に帰り、シャワーで海水をして、またバスタオルの上に転がる。数回それを繰り返すと眠気が差して来て、読みかけの本を脇に落として眠り込んでしまった。

夢の中で写真の塩田綾が微笑んでいた。

五時になつて、仕事を上がるというライフガードに搖り起こされた時には、日焼けで体が痛かった。

車に入れっ放しにしておいた携帯電話を確認すると、塩田文美なる人物からメールが入っていた。「ご迷惑をおかけします」というタイトルからして、綾の母親かと思つたが妹だつた。

突然のメールで、すみません。私はお兄さんを通してお願いをしている、塩田勝一の娘で文美と言います。綾は私の姉になります。

このたびは面倒なことをお願いしてすみません。きっと面倒臭がり屋の薄情な家族と思われていることと思います。私も直接ハワイへ行くべきでしょうが、つわりがひどくて飛行機に乗れません。大変失礼とは思いますが、私からもお願ひがあります。

もし姉が問題や悩みを抱えているようでしたら、まず私に連絡を

くれるようにならってください。とにかく日本に帰れ、と言つてもかまいません。

こんなことを書くと、桜井さんは驚かれるかもしませんが、私は姉が心配で仕方ありません。姉は私と違つて美人だし、頭もいいのです。

でも、ハワイに行く前には色々辛い思いをしていました。

うちの町はすごく考え方が田舎で、三十近くで結婚していないのはおかしいし、恥だと言われます。親戚にも近所にも言つていました。

姉はずっと父の病院で事務の手伝いをしていましたけど、仕事場でも言われていたと思います。

姉は器用な人ではないのです。

私もグズですけど、もし姉が何か困つているようなら、まず相談してほしいのです。両親、とくに父には、悩みごとなぞとも言えないはずです。

実はこんなメールを出したことも、父には知らせないで下さると、嬉しいのですけど。桜井さんのアドレスは、お兄さんが置いていたメモをこつそり見て覚えました。

父はすぐ外聞を気にする人で、自分をまるで、殿様かなにかだと思つてゐるのです。

結婚しても私が塩田姓でいることもそのせいです。

長々と身内の恥を書いてしまいました。ごめんなさい。

でも、どうか姉に会つて下さい。そして、もし父に報告出来ないようなことがありましたら、私にメールを下さい。

読み終えて画面から田を離すと、誠はシートの背凭れに身体を預けた。

塩田綾の父親の考えている事は分からぬが、人となりは何となく掴めた。文美という妹が、わざわざ綾の性格について書き送つて来たのは、気合いを入れて事に当たれという意味だろうか。

ともかく心配なのは分かつたし、彼女は綾がトラブルを抱えているだろうと予測している訳だ。

誠は綾の写真を思い出した。

家は金持ちで、美人で、しかも学歴があつても、必ずしも幸福だとは限らない。学校の事務員は、入校した頃は影があつたと言つていたが、そういう背景があれば影も出来よう。

もつとも独身でいる事は、本人の気の持ちよう一つだ。少しも悪い事ではないのだし。

綾自身がどの程度それらを気に病んでいたかは、妹のメールからは、伝わって来ない。「辛い思いをしていた」と言つても、状況から妹が憶測しただけかもしない。

次なる方法として、明日は綾のコンドミニアムを周旋した不動産会社に電話をしようと誠は思った。

アパートに帰つてシャワーを使い、スケジュール表を確認すると、翌日はモーニング・シフトだった。

米を炊いて肉を焼いただけの、ジェームスが見たら眉を顰めそうな夕食を摂り、テレビを眺めながら水割りを舐めている内に、カウチで眠りこけてしまった。

ほんの仮眠のつもりが、気が付くと朝だつた。
起こしてくれたジェームスは呆れ果てて笑つた。

「俺が帰つて来る前から寝ていて、今まで寝てた訳かい。言つておくけど、ベッドで寝た方がいいから起こそうと、そりやあ泣ぐまい努力をしたんだぞ」

寝付きが良いのと、放つて置かれればいつまでも眠るのが誠の体质だが、さすがに頭を搔いた。狭いカウチで寝たせいで体が痛い。誠がシャワーを使つている間に、ジェームスはさつさと出勤してしまつた。余程忙しいようだ。

昨日の事などを話してアドバイスの一つも貰おうと思つていた誠は、僅かに気落ちしたが、時計を見て出勤時間が迫つてゐる事を知り、大急ぎで支度をした。朝食を食べている暇はない。

それでも五分前には、タイムカードを押す事が出来た。

始業前のミーティングの締め括りに、フロア担当を言い渡される。今日は君代と二人で一階担当だ。マーク、トレイシーと雪子が二階。人のセールスを奪うのが生き甲斐のような雪子が一緒に、マークは早くも諦めが入っている。警備員のジョシュアがやって来て、大きなガラス扉の鍵を開けた。

「まこちゃん、今日は暇かもね。天気いいから皆、ビーチやアクティビティーに行っちゃってるよ」

君代がさらりと言つ。

「嫌だな、君代さんが言つ事つて、当たるんだもん」

これは本当だ。彼女が忙しくなると言えばそうなるし、逆の時も同じなので、誠は、彼女が自分で商売でもすればいいと思う。

「いいじゃん、のんびりしようよ。私、雪子さんと一緒にじゃないだけでほつとしてるの」

そういう日があつてもいいかと、誠は同調した。

適当にディスプレイの埃を払つたり、専用クリームで革のブリーフケースを磨いたりしながら客を待つたが、君代の言つた通り実に少ない。たまに入つて来る客は女性物を探していて、一階に誘導するだけで仕事はなくなつた。

自然、君代とお喋りばかりをした。

君代は三十五歳で、ハワイに来て六、七年になる。市の環境課に勤務する日系の夫がいる。取り立てて美人というのではないけれど、いつも明るいし、よく思いも寄らぬおかしい事を言つて、皆の人気者だ。

確か彼女は語学留学に来て、今の夫と知り合つたのではなかつたか。以前聞いた事を思い出し、誠は話題を変えた。塩田綾の事が頭にあつた。

「君代さん、ハワイに来たのは学校に行くためだつたよね？」
入社した当初は敬語を使つていたが、暫くして君代から止めてくれと頼まれた。

「そうよ、何でそんな事聞くの？」

実はさと、誠は塩田綾の事について話した。今朝ジエームスに、聞いて貰えなかつたせいもあるかもしれない。妹からのメールについても喋つてしまつた。

君代は兄の住む町の辺りの出身ではないから、問題ないだろつ。年齢的にも塩田綾に近い。考えを聞いてみたかつた。

「留学に来る人は、それぞれ違うからね」

ゆつくり君代は口を開いた。考えながら言葉を選んでいるようだつた。

「でも、彼女の事情は私とちょっと似てる」

「似てるって、結婚してなかつた事とか？」

「うん、その頃結婚を考えていた人と、上手く行かなくなつた事もあつて、自分の人生はつまんないなあつて思ったの」

「仕事は何してたの？ それもつまらなかつた？」

「うん、中堅の会社で事務員。うちはその塩田さんみたいにお金持ちじゃないから、その所は違つんだけど、やっぱり段々結婚しない事も、周りから言われた。同期の子はほとんど結婚退社しちやつてたし。だから彼氏と駄目になつた時には、お先真つ暗だと思つた」

誠の顔を見て君代は少し笑つたが、いつもと違つて少し寂しそうに見えた。

「いい年した女が結婚してないってだけで、欠陥品みたいに扱われる場所があるのよ。段々自分でも、自分が無価値な人間に思えてくるのは辛かつたわ。それで、えいっと思って留学したの。一応短大は英米文学科だつたからさ、語学力を付けて、せめて自分で認められる自分になりたかったのね」

「来て良かったじゃないか。セールスの仕事も好きなんですよ？」

「それは本当にそう。旦那と会えて、結婚もしたしね。だから、ハイに住んでいられるんだし。留学に来て、予定通りきつちり勉強して、仕事に役立てている友達もいるわ。ただ、私達は軌道に乗れた部類なのよ。断つておくけど、自慢じやないからね」

何か言いたい事があるようだ。誠は首を傾げた。「乗れない部類のは、何さ？」

「えいって日本を飛び出して、でも思うように行かない人達。大学に入ろうとして、試験に合格しなかったり、良いパートナーや仕事と出会いたいと思っても、見付からなかつたりね。上手くいかないままで日本に帰りたくないんだけど、じたばたしている内に、お金やビザが切れてきちゃう」

君代の瞳は珍しく、きつい色に染まっていた。誠の見えない何かを見ているようだ。

「大概の人は、仕方ないから日本に帰るよね。でも、『ぐぐぐ』一握りの人は、違法で働いたり不法滞在しちやうのよ。どうしても失敗したまま、日本に帰りたくないってね。自分でも訳が分からなくなつちやうのかも」

「話には聞いたことがあるけど」

誠が違法でなく働けるのは、アメリカの市民権を持っているからだ。

商社勤めの父が、二十四年前にシアトル在駐だつたため、アメリ

力国内で生まれた誠には自動的に市民権が下りた。

本来ならば二重国籍者は、十八歳になつた時点でどちらかを選択しなければならないが、国同士で戸籍の照会などはしない。システムの抜け穴を甘受しているわけだが、誠も立派に、法律違反を犯している。

「無理矢理何とかしようとしても、むしろ悪くなる事が多いよ」「悪くなつた人、知つてる?」

溜息とともに、君代は「うん」と頷いた。

「こっちの大学に入るつもりで来たのに、入学する語学力が身に付かなくてね。『こんな筈じやない』って焦るばかりで、お金はなくなつちゃうし。こつそり働き出して、勉強には身が入らないし、悪い薬も覚えて、おしまいには強制送還。最低でも五年か、下手すると一生アメリカには入国出来ないわ。そういう人がいた」

ありそうな話だ。君代は、どこかが痛いような顔で続ける。

「まこちゃんは学校にちょっととしか行かなかつたんでしょ? 私は結婚した後もしばらく行つてて、合計一年半位かな、だから色んなケース知つてるよ。でもね、法外な借金とか犯罪に関わつたんじゃない限り、大抵の事は日本に帰る事で解決が着くの」

「そういうものなの?」

「そうよ、まこちゃん、何とかしてその人捜してあげて。きっといい状態じゃないから、捜して日本に帰るようになつてあげなよ。本当は、自分の価値を認めることなんて、海外に出なくたつて出来るんだよ」

思いの外に強い調子で君代は言つた。今話した事の他にも、思い入れもあるようだ。

三年ハワイに住んで、随分色々な経験をしたが、まだまだ誠の知らない事の方が多いのだ。「分かつた、努力してみるよ」と素直に返事を返した。

君代と話したせいかもしれない。妙に急いた気持ちになつて、誠は昼休みに、塩田綾のコンドミニアムを持つ不動産会社に電話した。

塩田綾の代理人だと言つて、担当者に電話を回して貰うと、誠が何も言わない内から「家賃の連絡が届きましたか」と質問された。

「家賃と言つと、払つてないんですか?」

面食らいながら発した質問に、相手の男性は甲高い声で答えた。
「あれえ、その件じやないんですか。ええとね、五月分は四月の末迄に払つて貰わなきやなんなかつたんです。それがまだなもんだから、手紙も出したし、電話もね、何回もしたんだけど」

怒つている口調ではない。誠は手短にかつ少々一方的に事情を説明した。様々な相手に何度か説明しているので、大分慣れて来た。
「そういう訳で、一応私が正式な代理人なんです。家賃は払いますから、コンドミニアムの部屋を確認させて貰えませんか? 合い鍵はお持ちでしょ?」

拍子抜けがする程あつさりと相手は承諾した。

「いいですよ。正式な委任状をお持ちなんですよね。でも、そんななら警察に届けた方がいいけどねえ。それで、いつがいいですか?」

誠は自分のスケジュールを思い出して、明日の昼時ではどうかと提案し、ついでに家賃の金額を聞いた。

「明日の十二時位がいいですね。ええ、家賃は千八百ドルなんですが、遅延のペナルティーが加算されますから千八百九十ドルですね」

苦虫を噛み潰して、誠は声だけ爽やかに「それでは明日」と電話を切つた。

金額はまだ知らないが、兄が送つてくれたという為替は届き次第、現金化することになりそつた。貯金は多少あるが、千八百九十ドルは痛い。

午後も客の数は少なく、誠は君代や、二階から暇潰しに来たトレイシーと無駄話をして過ごした。

六時の退社時間に、誠はトレイシーに声を掛けた。
「飯、食つて帰らないか?」

トレイシーはダイヤモンドヘッドの北側、ハワイ大学の近くに住んでいて、大きなアパートを一人のルームメイトとシェアしている。両親も島内にいるのだが、高校卒業と同時に離れて住み始めた。誠の誘いに快諾してトレイシーは、行きつけのバーの名前を出した。

「あそこのピザが食べたいな」

ジョージも含めて三人がよく行くバーは、ワイキキの一番ダウンタウン寄りにあって、アラ・ワイ・ヨットバーに近い。バーとは言つても食べ物のメニューも豊富で、ベーコンとアボカドのサンディウッチや、山ほど具の載つたピザは絶品だ。

バーテンのジェイソンがジェームスの古い友人なので気安い。車をヨットハーバーの公営駐車場に停めて、二人はバーに入った。まだ早い時間なので店はがらんとしている。ジェイソンに挨拶し、奥の居心地の良いブースに腰を下ろす。

オーダーして三十秒で運ばれて来たビールで喉を潤し、ピザを待つ間、誠はトレイシーにこれまでの経過を話して聞かせた。

家賃の肩代わりの話をし、金額を口にすると、トレイシーは大きく口を開けた。

「あんた、そんなお金持つてるんだつたら、ここは奢りなさいよ」

「馬鹿言え。ちゃんと兄貴を通して請求するさ」

軽口を叩き出したと見えたトレイシーは、一瞬考え込むと大声を出した。

「そうだ、彼女の写真持つてないの？」

「メールの添付ファイルを開ければ見られるけど、なんですか？」誠にはさつぱり話が見えない。

「彼女凄いお金持ちなんでしょう？　うちの店に来た事あるんじゃない？　見せてよ」

トレイシーが素晴らしい思い付きの様に叫んだので、誠は、はいはいと携帯電話を操作した。

しかし、塙田綾が店に来た事があつたら何だというのだ、と思い

直してその事を告げると、彼女は肩を竦めて「ああそつか」と笑つた。

「でもさ、もしここ一ヶ月の間に来て、買い物したんだとしたら、元氣でいて、経済的にも困つてないって事じゃない」

それは苦しい言い訳だと思いながらも、誠は運ばれてきたピザに噛み付いたトレイシーに、写真を見せた。

一瞥してトレイシーは叫び声を上げた。口に入っていたチーズが、誠の顔まで飛んだ。

「この人、知つてるよ。一時期よく来てたの。お得意リストに載せようかと思ったもん。でも、ちょっとして来なくなっちゃったから、載せなかつたけど」

店ではセールス一人々々が自分の得意客リストを持つている。ハワイ在住、あるいはハワイに来る度に来店して、多額の買い物をしてくれる客に住所を聞き、新商品のカタログやセールの通知を送るのだ。

ナプキンで顔を拭い、トレイシーを一睨みして誠は尋ねた。

「四月中の話か？」

「ううん、去年だよ。でもいつも簡単に決めて買つてた。うちの定番商品は幾つも持つてたみたいで、新しい型のとか、日本に入つてないのを買つてた。バッグ道楽だつて笑つてたけど、靴もアクセサリーも買つたよ。感じの良い人だつたから、よく覚えてる」

「その割に、名前は覚えていなかつたじゃないか」

「ふん、あんた、自分のリストのお客だつて、覚えてるの？」

そう返されると一言もない。名前まで覚えて顔と一致する客など、ごく一部だ。これが東京やニューヨークなら違うのだろうとは思う。

ここでは、多額の金をブランド品に注ぎ込むのは、そのほとんどが旅行者なのだ。五千ドルの買い物でも、一年に一度ではなかなか名前まで覚えられない。

結局分かったのは、塩田綾はやはり裕福だったという事と、年下のセールスにも丁寧な態度を取る人間だつたという事だけだ。

明日、コンドミニアムを訪れてみれば、確実に新しい展開になるだろうと誠は自分を慰め、胸焼けがする程ピザを大量に詰め込んだ。

第一章・第八話 「評価」（後書き）

作中、君代と誠が日本人留学生の動向に関して言及する場面がありますが、実際の日本人留学生の方達の状況ではなく、あくまでも作中人物の知る範囲で、意見であると受け取つて頂ければ幸いです。

しかし、君代の台詞に興味を覚えられた方は、お時間がありますたら「呼ぶもの」（これも完全なフィクションです）も、ご一読下さい。

帰宅したのは九時半だった。

ジョーモスが誠宛に、自宅の留守番電話にメッセージが入っていると言う。彼の入浴中に掛かつて来たそれは、日本語だったので放つてあると付け足した。

ジョーモスは「アリガト」と「サヨナラ」位しか、日本語を解さない。さては兄だろうと誠は即座に思った。新たな難題だったら頭が痛いけれど、もしや塩田綾がついに実家と連絡を取つたのでは、という期待感も否めなかつた。

半分わくわくしつつ、再生ボタンを押す。聞こえて来たのは意に反して、細い女の声だつた。

「あの、私、浅井です。塩田綾さんの事でお話があるとコウ「さんから聞いたので、お電話しました。また、電話します」

それだけだ。自分の電話番号は残していないし、非表示でかけて来ている。わざわざ自宅に掛け、しかも自分の番号を残さない所を見ると、警戒しているのだろう。若い女性の事だから無理もない。誠としては、彼女が掛け直してくれるのを待つしかない。

もう一度電話が掛かる事を期待したが、その晩、浅井友子からの電話はなかつた。

翌水曜の朝は、例の不動産会社の担当者と会うために早目に起きた。

いつものように出勤の支度をしたが、ユーフォームのスーツでは物々しいかと思い、上半身は黒いポロシャツにした。

昨日電話で聞いた所によると、コーンウェル不動産は塩田綾の学校に近いビジネス・ビルにある。

一日前と同じ様に、誠は車をアラモアナ・ショッピングセンターに停めて歩いた。天気は相変わらず良いが、楽しい事をしに行く訳ではないので、日射しも気に障る。

ビルの十階にあるオフィスは思ったより広かつた。受付といふものはなかつたが、近くにいた女性が用を聞いてくれて、奥に通された。

やつて来た声の高い担当者は、アジア系の中年の男だつた。
「やあどうも、私が担当のグレッグ・ヒラタです。何だか大変ですね。警察には連絡しましたか？」

「今日、コンドミニアムの部屋を見てから決めます。ええと、まずこれが委任状です」

テーブルの上にPower of Attorney を広げると、ヒラタ氏は「なるほどねえ」としげしげと眺めた。

「これ、コピー取らせてもらつていいですかね？ 後で間違いがあるといけないから」

ヒラタ氏は一旦奥へ入り、戻つて来た時には、委任状の原本と共に、何か台帳のよつな物を抱えていた。

「それと家賃をね、お願いしますよ」

内心溜息を吐きながら、誠は持参した小切手帳を取り出した。昨夜は浅井友子から連絡がないかとそればかりを考えて、兄に連絡するのを忘れていた。

ヒラタ氏の言つ通りに、受け取り人の欄に「ーンウェル不動産と記入する。

銀行口座からの引き落とし制度が一般的でないアメリカでは、個人の小切手がどこでも通用する。最近は光熱費などはインターネットでの振り込みや、クレジットカードの支払いが主だが、こうした小さい会社は小切手が一般的だ。

「あの、領収書下さいね」

最後に小切手にサインをし、そう頼んだ時、いじましく上目遣いになつてしまつた。

「おお、もちろん、もちろん。大金だものねえ」

ペーパーワークが終了し、さて出かけるのかと思いきや、ヒラタ氏は少し待つてくれと言つ。もう一人同行者がいるのだが、仕事に

区切りが着かないそうだ。

女性の住まいを訪ねるので、男一人では塩田綾とかち合つた際、警察に電話されかねないという配慮だ。同行してくれる彼女を待つ間。誠はヒラタ氏と世間話をして時間を潰した。

一般的に、ハワイの人間は人種を問わず話好きだ。警戒心が薄いというか、それを皆、アロハ・スピリットと呼んでいるが、とにかく親しみ易い。

本土の人間は冷たくて、お高くとまつていると多くの人が言うのも、ハワイの環境が普通と思えばそう感じるからだろう。ヒラタ氏も例外ではなく、誠はあれこれと出身や仕事の事などを聞かれた。誠が塩田綾が部屋を決めた経緯を尋ねると、幸いな事に覚えていた。学校がその時期入校した生徒を、何人か纏めて周旋したのだそうだ。

「あの学校の生徒さんは、金持ちが多いんだが、彼女はひときわだつたね。ワンベッドルームで千八百ドルだもの。色々な物件を説明したんだが気に入らなくて、値段は構わなかからって言うんでもそこでしたんですよ」

これまで誠が集めた情報だと、とにかく裕福という印象しかない。誠が力無く笑っていると、同行の女性が仕事を終えて来た。白人の若い女の子だった。二十歳位に見える。茶色の髪を無造作に束ね、化粧はしていない。彼女はヘレンと名乗つた。

帰りにアラモアナ・ショッピングセンターで降ろしてくれると言うので、誠はヒラタ氏の車に同乗した。

ヘレンはあまり事情を説明されていないらしく、矢継ぎ早に質問をし、ついにはヒラタ氏に「ちょっと黙つとけ」とたしなめられていた。

カピオラニ・ブルーバードを通り、コンベンションセンターの角を曲がつてカラカウア・アベニユーに入る。コンドミニアムへ続く細い路地も、ヒラタ氏は馴れた調子で飛ばした。

車を駐車場に入れ、エレベーターで一旦一階へ降りてから、念の

ためにインター・ホンの応答がない事を確認し、居住者用のゲートを専用の鍵で開ける。

ヒラタ氏は淡々と居住者用のエレベーターに乗り込み、ボタンを押す代わりに、ボタンの脇の鍵穴に別のキーを差し込んだ。途端に三十一階を示すランプが点いた。

「すこいいセキュリティーねえ」

ヘレンが感心して声を上げる。このシステムだと、そこに住んでいる人間以外は、特定の階に行く事は出来ない。訪問者がある度に、一階まで迎えに出なくてはならない手間はあっても、一階のゲートに加えて二重のセキュリティーだ。

エレベーターが開くと、厚いオレンジのカーペットが敷かれていた。それぞれの部屋の扉は重厚そうな木製だ。3102号室の前に立つと、何となく緊張した気持ちになった。

ヒラタ氏が鉄製のノッカーを何度も叩き、「ミス、シオタ」と呼んだが応答はない。

「ローンウェル不動産の者です。開けますよ」そう言いながらヒラタ氏が、ついにドアの鍵を外して開けた時、わずかに手汗をかいているのに気が付いた。

玄関から繋がるリビングルームはひつそりと静まり返っていた。タイル敷きの玄関には、女性物のサンダルが一足脱ぎ捨ててある。玄関脇は天井まである物入れが、木製の格子の扉に仕切られてあつた。誠はもじもじと靴を脱いだ。ハワイの家では常識として土足禁止になつていて。

足が埋まりそうなカーペットはクリーム色だ。玄関から見ただけでは分からなかつたが、リビングルームは実に広かつた。十畳どころではないだろう。窓は閉まつていたが、カーテンは半分開いている。

正面に別のビルが建つてるのでオーシャン・フロントとは言えないが、ビルの間から充分海が望めた。長方形のリビングルームの中で、窓に近い所にカウチとコーヒーテーブル、テレビセットが置

かれ、玄関に近い場所にダイニングセットが置かれていた。テーブルの上に何冊か本が載っている。

その奥、壁を挟んで玄関の隣がキッチンだった。

「埃が溜まってるよ」

ヒラタ氏がテレビセットの上を指差す。頷いて誠は尋ねた。「ベッドルームは?」

ベッドルームへのドアはリビングの窓側にあって、わずかに開いていた。思い切って押して入る。

微かに体臭のようなものがしたが、格別三人を飛び上がらせるような物はなかった。リビングルームに比べれば狭いが、それにしたって誠のアパートのベッドルームとは、比べ物にならない。

何か殺風景な印象を与えたリビングルームとは違つて、さすがにこちらは生活感があつた。ウォークイン・クロゼットの扉が開いていて、ベッドに何枚か洋服が掛けたり、ベッドの足元の洗濯籠にもタオルなどが入つていた。

「彼女、帰つていなかしら? どう見ても、当分留守にする予定で家を出た感じじゃないわよね」

ヘレンの感想に、ヒラタ氏と誠はそれぞれ低い声で同意を示した。それでもスーツケースの有無を確認しようと、誠はクロゼットを覗いた。スーツケースを持っていない訳はない。

赤い大きなスーツケースは、確かにあつた。外の洋服やバッグも目に入り、誠は違和感を感じて眉間に皺を寄せた。

ハンガーに掛けてある洋服は、いずれも派手なだけで安手の物だ。中には職業を疑われる程、短いタイトなスカートもある。そして大した枚数はない。

棚に置いてあるバッグはたつた一つ。片方は誠の勤めるブランドの物なので、直ちに新しい型ではないと分かった。もう一つも少々草臥れて見える。

室内に外の物入れがないか事を確認して、誠は玄関に行つた。訝しげな顔をする一人には、「ちょっと気が付いた事があつて」とだ

け告げた。玄関の収納を開ける。

中についたサンダルは三足だけで、高級ブランドの物だが古い。誠の頭にある疑念がよぎった。

塩田綾は本当にここに住んでいる、あるいは住んでいたのだろうか。トレイシーが話していた、塩田綾が購入したバッグや靴は何処へ行ってしまったのだ。

誠が玄関の収納の前で考え込んでいる間に、ヘレンはキッキンを覗いていた。

その彼女が呼んだので、誠とヒラタ氏はキッキンへ入った。ヘレンは牛乳のパックを片手に、少し興奮した声を出した。

「これ、冷蔵庫に入つてたの。賞味期限の日付を見よ。三月二十日つて書いてあるわよ」

やはりこの一月の間、ここで人が生活していた形跡はないようだ。

「急に思い立つて旅行つて事も、ないだろうねえ」

ヒラタ氏が困惑し切つた顔をして、腕を組んだ。ベッドルームにライティングデスクがあつた事を思い出し、誠は彼を促した。

「パスポートを確認しましょう。あるなら机の抽斗じゃないですか？」

意外なほど塩田綾の持ち物は少ない。捜し物は困難ではなさそうだ。ベッドルームの机の上には、未開封の手紙が何通か載つていた。どれもダイレクトメールで私信ではないが、宛先はたしかに塩田綾になつている。

机の脇の洒落た棚には、写真立てが三つ置いてあつた。一番後ろにある大きなものは、六枚の写真が入るもので、学校の教室でクラスメイトや教師と撮影したものばかりだ。

手前の一つには、日本人の女の子と並んで写つていて。背景に有名なレストランが入つていたから、すぐに北海岸、ノース・ショアと呼ばれる地域のハレイワの町だと分かつた。

綾の隣ではにかんだ笑みを浮かべている女の子は、塩田綾よりも大分若い。これが浅井友子かもしれない。

さらに一番目立つ場所に、麗々しく飾られている写真を見て、誠は内心深く頷いた。塩田綾には付き合つてているボーイフレンドがいたらしい。いや、いふらしといふべきか。

ポリネシア人とどこかの混血らしい男が、塩田綾の肩を抱き寄せている。整った顔立ちで、美男美女のカップルと言えた。男の顔に触れそうな位置で、塩田綾は誇らし気に微笑んでいる。

屋内だが照明の具合で、ナイトクラブか何処かだろうと誠は判断した。

「この写真立て二つ、持つて行つてもいいですか？」

浅井友子に接触する事が出来れば、写真を見せて、このボーカーレンドの事を聞けるだろう。後々、塩田綾に怒られたら謝り倒すまでだ。ヒラタ氏は構わないと答えた。

「でもとにかくね、警察に届けた方がいいですよ。そりや、大した捜査はしてくれないだろうけど、やつぱりねえ」

と付け加える。誠は「今晚、彼女の家族にそう言います」とだけ言つた。

続いて机全体を眺め、四段ほど並んだ抽斗に手を伸ばす前に、周辺を見回した。机の上がすつきりしているのは、ノートパソコンを塩田綾が持つて出ているからだとすれば、納得が行く。

誠は上から、抽斗を開けてみた。一番上には筆記用具と文房具が入つていた。

一番目には、誠の勤めるブランドの靴箱が入つていて一瞬驚いたが、丈夫で一見お洒落なそれは、書類入れにもなるだろうと、取り上げて開けてみた。

やはりそうだった。学校の在籍を示すI-20や、Jのコンドミニアムの賃貸契約書の間から、パスポートが顔を覗かせた時には、理由もなく溜息が洩れた。

中を開いて見ると、紛れもない塩田綾の物だ。箱の中にはその他に、電話会社の契約書や銀行の口座開設の書類などが入つていた。

銀行の口座開設の書類があつたからには、塩田綾はハワイの銀行を使つていた筈だが、生憎と毎月送られて来るステイトメント、出入の記録と残高証明の類は三段目にも四段目の抽斗にも見当たらなかつた。

野次馬根性と言えばそれまでなのだが、誠は彼女が購入したバッグや靴の行方と共に、経済状態も気になつた。

机を点検し終わると、あとはバスルームが残るだけだつた。

バスルームはベッドルームの奥だつたが、キッチンの脇からもドアがあり、来客は住人のベッドルームを覗かずに、バスルームへ行ける設計になつてゐる。手前にシンクが一つ並んだ広い洗面所があり、奥のトイレと風呂場は別れていた。

片方の洗面台には髪の毛が数本落ちて、化粧道具が無造作に置かれてあつた。元々そこが定位置としてあるのではなく、使い終わつた後に時間がないので、そのままにして行つたという風情だ。

ヘレンが長細いプラスティックの何かを取り上げた。緩んでいたキャップを捻つて、中身を引き出してみた所で、誠はマスカラだと分かつた。

「固まっちゃつてる。やつぱり帰つてないのね

トイレと風呂場には、特別何もなかつた。調べるべき事は調べたので、三人は言葉少なに部屋を出た。

直前に、ヒラタ氏が持つっていた紙とペンを借りて、ダイニングテーブルの上に家族に連絡するように伝言を残した。

エレベーターを待つ間、誠は思い付いてヒラタ氏に尋ねた。

「そう言えば、彼女は車を持っていたんでしょうか？ 何か聞いていますか？」

「いや、うちの会社ではそういう事まで管理しないから。でも、この管理人に聞けば分かるでしよう。住人は各自自分のパーキングがあつて、そこに停める車は届け出ることになつてゐる筈だ」

一階まで降り、エレベーターの扉が開いた時、中をよく見ないで乗り込もうとした人物とぶつかりそうになつた。相手は慌てて体を引き、それから「オオッ」と声を出した。

警備員のキモだつた。

「マトコじやねえかい。また例の彼女の事で来たんかい？」

マコトだと訂正してから、誠はマネージャーがオフィスにいるか

どうか聞いてみた。もちろんいると言つてキモは、オフィスに向かう三人の後をついて来る。また、暇らしい。

オフィスではマネージャーが、パソコンをいじつていた。

グレッグ・ヒラタが来意を告げ、塩田綾が車を持っていたかどうかを聞く。不動産会社の人間だけに、マネージャーは簡単に教えてくれた。

「そうかい、部屋には帰つてないのかい。警察に届けなきゃいけないだろよ。ええつと、3102号室ね」

渋面を作つて先日とは別のファイルを出し、捲り始める。パソコンでデータを呼び出すよりも、早いのかもしない。

「あつあつた、3102号室のパーキング・ストールは156で、車はね、赤のBMW」

マネージャーがそこまで言つた時、キモが急に口を挟んだ。「そんな車ねえよ」

驚いて彼の顔を見ると、キモは得意そうに鼻を鳴らした。

「156つたら三階のマウカ・サイドのダイヤモンドヘッド寄りなんだ。俺は一日に何度も見回るんだぜ、そんな車はねえ。何だつたら行つてみな。この一月の話じゃねえよ。もつとずっと前から……、いや待て、四、五か月前はあつたな、そう赤いBMWだつたよ」

マウカ・サイドとは、山側という意味だ。地元ではよく使われる、ハワイ語と英語の混成だ。ちなみに海側はマカイ・サイドと言う。毎日ビルの内外を見回つているキモの言うことだから、間違いがあるとは思われない。とすると、四、五か月前から、塩田綾はあまり部屋に帰つて来ていない事になる。

帰つて来ても短時間で、だからキモが車を見なかつたのではない。誠は部屋で見付けた写真の男を想い浮かべた。

マネージャーとキモに礼を言い、三人はオフィスから駐車場に向かつた。ヒラタ氏の顔が短時間に急に疲れた様に見える。自分もそうなんだろうと誠は思った。

アラモアナ・ショッピングセンターへ向かう車の中で、ヒラタ氏

と誠は簡単に今後の事を話し合つた。誠は塩田綾の家族に連絡し、仮に塩田綾が見付からなくなるとも、部屋を引き払うかどうかを決める。あの部屋は家具付きで、カウチもベッドも塩田綾の持ち物ではないから、大きな荷物はない。誠が手続きを代行し、荷物を日本に発送する事も可能だ。

「まあ、本人がひょっこり戻つて来るのが一番だけど、当面はそちらから、御家族にどうするか聞いて下さい」

部屋の処遇についてそう結び、更にヒラタ氏は「ぼそぼそ」と続けた。最初に話した時の甲高い声はどこかに行ってしまった。

「うちの娘も本土の大学へ行つてゐるんだが、心配だねえ、こういう事があると」

アラモアナ・ショッピングセンターで降りしてもいい、腕時計を見るとまだ一時半だつた。

第一章・第十一話 「パートナー」

仕事は三時からだ。誠はショッピングセンター内で時間を潰す事にした。

三階の広場に出でているカートでコーヒーを買い、空いていたテーブルを見付けて腰を下す。アラモアナ・ショッピングセンターは全面禁煙なので、煙草は吸えない。

コーヒーを啜りながら、塩田綾の事とその報告について考え始めた。

誠が見た写真からいって一番考えられるのが、塩田綾にはボーイフレンドがあり、ほぼ同棲に近い生活になってしまっているという事だ。服や靴が見当たらない事も説明が着く。

金銭的に余裕のある彼女の事だから、化粧品等は新たに購入したのかもしれない。

ただ腑に落ちないのは、部屋の様子がいかにもちょっとした外出の風になっていた事だ。塩田綾の生活習慣を知らないので何とも言えないが、普通、服をベッドに掛けたままにしたり、冷蔵庫の食品を一月も放置したりするものではない。

もつとも彼女が、そんな日常の些事など気に留められない程、ボーイフレンドとの関係に有頂天になっているのなら話は別だ。

あるいはアメリカ国内で旅行にでも出てトラブルに遭つたか、という考えは、一瞬誠の頭に浮かんで、直ぐに打ち消された。

確かに彼女のスーツケースが一つとは決められないし、国内の旅行なら原則として日本のパスポートは要らない。しかし旅行なら、それこそ部屋をあんな風にしては行かないだろう。

それにパスポートが必要でない、というのはあくまで原則だ。飛行機に乗る搭乗手続きでは必ず身分証明が必要だ。

誠はボーイフレンドの線が濃厚だと、頭の中で再確認し、次にすべき事を考えた。

今日、塩田綾の部屋に入った事を兄に報告し、警察や領事館に届けるかどうかを尋ねる。ついでに彼女を捜す事自体も、続行して欲しいか聞いておこう。部屋代の請求もしなくてはならない。

塩田綾と連絡を付ける事については、まず浅井友子と話すべきだろ。それとも、と考えて誠は写真立てから抜いて、ポロシャツのポケットに入れておいた写真を取り出した。

塩田綾の肩を抱いて笑っている男は、彼女と同じく見えて、三十歳前後か。ナイトクラブかどこかで撮つたらしに写真を見ながら、誠は二日前に会つた語学学校の女の子達を思い出した。

ピンクのTシャツが言つていた、ナイトクラブに行つてみるのも一つかと思う。

今後の展開を適当に想定した所で、誠はコーヒーを飲み干した。立ち上がりて紙コップをゴミ箱に放り込み、ぶらぶらと歩き出した。

その夜も、思いの外に忙しかった。

ゴールデン・ウィークの前半に働き、後半からその後にかけて休みを取る人もいるのだろう。

忙しかつた分売り上げも上々で、誠が機嫌良くアパートへ帰ると、ベッドルームからはドアを閉めているというのにジエームスの鼾が聞こえた。これ程の大音量なのは、疲れてストレスが溜まっている証拠だ。もつとひどいと歎きしきりが加わる。

誠はユニフォームを脱いで、カウチの背に掛けた。

まずベランダに出て一服しつつ、兄に電話する。携帯電話に掛けるとすぐに繋がつた。誠からだと分かると、兄は「待つてろ、今すぐ掛け直すから」と一旦電話を切つた。電話代の負担も悪いと思つているのかもしれない。全く兄らしい。

誠が塩田綾の部屋の状態を報告すると、兄もさすがに溜息とも唸り声ともつかない声を出した。相手が兄なので、[写真の一件も包み隠さず伝えた。

「その男がボーキフレンドかどうかは分からないけどね、どう院長

先生に報告するかは、そつちで決めてくれ

「そんなこと確証がない限り言えないよ。帰つていならしいと伝えよう。それと家賃の件は、出して貰つ事にしよう。一応領収書を

PDFで送つてくれ

「警察や領事館には、やつぱり届けないのかい？」

兄の返事には僅かに間があつた。

「俺も聞いてはみたんだが、届け出ても別に、人員を割いて捜査してくれる訳じやないだらうつて言つんだな。領事館も同じ事だ」「でも万が一つて事もあるぜ。兄貴だから言つけどさ、『実は身元不明の死体になつてました』だつたらどうすんの？」

昼間思い付いたボーキフレンドの線でなければ、誠の手にはビリう考えたつて余る。

「そういう事も、絶対ないとは言つきれないかもな。よし、もう一回言つてみよう。ところで、話は変わるがな」

口調ががらりと明るくなつた。誠は逆に兄が何を言つ出すかと、少し緊張した。

「お前、彼女はいないの？　お前の年だと、結婚てんじやないだらうけど。この間お袋と話していて、将来お前が、目や、肌の色が違う嫁さんを貰いたいって言つても、いい人なら構わないよねつて話になつてさ。今度みたいな事があると尚更だよ。俺達はお前の嫁さんがどこの人でもいいから、姿を眩ますような真似はしないでくれよ」

全く自動的に、誠は乾いた声で笑つた。自分でも驚く程の流暢さで嘘が流れ出る。

「そりや、嬉しいな。実は好きな子はいるんだよ。店の同僚でさ、日系一世なんだ。美人だぜ。時々、飯食いに行つたりしてるんだけど、競争率高くてさ」

兄は全く理解があると思つ。しかしそれはあくまで「嫁さん」という範疇の中だ。肌の色が違つて、ついでに「嫁さん」だつたらどうするのだ。

今の誠には、到底それを言つてのける勇気はない。適當な事を言つて誤魔化し、将来家族が遊びにでも来る事があつたら、美人で日系一世のトレイシーに芝居を打つて貰うしかない。

「そうか、頑張れよ。日系なら日本人を好きになつてくれるかもしれないぞ」

弾んだ声で、兄は誠を励ました。

電話を切り、誠はベランダの手すりにがっくりともたれた。自分が女性を愛するタイプではないと覺り、その為の努力を止めたのは、ハワイに来る少し前だ。

ずっと若い頃には、奥手なんだろうと自分を慰めていた事態が深刻化し、どうにも動かし難い状況になつていて。

変われる筈だ、変わらうという努力はした。女の子とも付き合つてみたし、それなりの行為もしたが、違和感は否めなかつた。

もう仕方がないだろうと見切りを付けて、日本を出たのだ。

ゲイでいる事は悪い事ではない筈だ。少なくとも法律には触れない。しかし、世の中にはそちらの犯罪者より質が悪いと思っている人間も大勢いる。

自然の摂理というやつに反するのは大変な悪らしいが、誠にひとつは同性に恋愛感情を抱く事が自然なのだ。男と生まれたからには、必ず女性と付き合つて結婚し、子供を作るべきだとは到底思えない。そんな正直な気持ちは、他人に向かつてなら言えるのだ。受け入れられなければそれ迄だからだ。「そうですか、俺もあんたなんか嫌いだよ」と言えるからだ。ところが身内はそうはいかない。

同性愛を容認出来なければ、そういう息子なり、弟なりを持つてしまつた事で不愉快だらうし、縁を切るの勘当するのと言つたところで、赤の他人と絶交するのとは違う。

誠は頭を振り振り、キッチンへ行つた。濃い水割りを作る。

毎日こんな電話があつたら、あつと言つ間にアルコール依存症になつてしまふだらうと考えて、誠は一人肩を竦めた。

日本にいた時は一人暮らしではなかつたから、常に嘘を吐きまく

つていて、それが当たり前だったのだ。今はどうだろ。大好きな相手と一緒に暮らして、同僚も友人達も何も言わない。

そういう生活だから、たまの電話が応えるのだ。日本にいた頃の生活を思い返すと、当時はそれ程とも思わなかつたのに、実に寒々としていたと感じる。一度と戻れるものではない。

ベランダに出て煙草に火を点ける。

胃にアルコールが染みて来るのを感じながら、塩田綾はどうだったのだろうと考えた。

日本で、妹の言うところの「不器用な」生き方をしていた彼女は、ハワイに来てましな生活を手に入れたのだろうか。

電話の音で覚醒しながら、誠は一日酔いの頭を抱えた。

昨晚、自分の事や塩田綾の事を考えていたら取り留めもなくなり、つい飲み過ぎた。マットレスからよろよろと立ち上がり、キッチンカウンターの電話を取る。「ハロー」と言つた声はひどく掠れていった。

「May I speak with Mr. Makoto Sakurai?」

尋ねた声には明瞭な日本語のアクセントがあつたが、誠は頭が働かず、うすぼんやりと答えた。

「This is him speaking. How many I help you?」

言つてから店ではないのだと気が付いたが、相手は気にしているようだ。

「あの、日本語でいいですよね。私、浅井です。一昨日、綾さんの事でお電話しました」

まるで予測していなかつた事に加えて「一日酔いで、誠は「ああ、ええ」とじどうもじどうの応対になつてしまい、やむを得ず平手で自分の頬を叩いた。音は浅井友子にも聞こえただろう。

「すみません、寝起きなものでちょっとぼんやりしまして。お電話有り難うござります。塩田綾さんの事なんですが、事務のコウコさんからは、どの程度お聞きになつていますか?」

何とかいつものセールス口調が出て来た。

「ええと、綾さんの家族が彼女と連絡が取れないって事と、綾さんが学校に出て来てないって事ですけど」

高めの声だが甲高くはないし、語尾を伸ばす甘つたれた喋り方でもない。しかし、話題のせいか、見知らぬ人間との会話のせいか、浅井友子の声は何処かおどおどしている。

「そうなんです。浅井さん、塩田さんの居場所を御存知じゃありませんか？ 彼女は「ソンドミニアムにも帰っていないようなんです。僕に塩田さんの居場所を言う必要はないんです。御家族に連絡するように伝えて頂ければいいんです」

「それが、あの、私も綾さんにはずっと会つてないんです」

誠の力説するような口調と対照的に、浅井友子は蚊の鳴くような声で答えた。誠としては「そうですか」としか答えようがない。落胆は隠せなかつたが、気を取り直して誠は尋ねた。

「分かりました。それでは塩田さんの事でお話を伺いたいので、お時間取つて頂けませんか？」

多少躊躇の声を出した浅井友子に、どうしても必要だから、と誠は頼み込んだ。やや間があつてから、やつと浅井友子は承知した。

「UHまで来てくれますか？ 明日の昼過ぎなら丁度いいんです」

今、浅井友子が通つている、ユーバーシティ・オブ・ハワイだ。

「行きますよ、勿論」

スケジュールは珍しく覚えていた。明日は休みだ。島の反対側だつて行ける。浅井友子は構内のカフェテリアの場所を誠に教え、誠は礼を言つて電話を切つた。

テレビセットの上の時計を見ると、まだ十時だつた。

リビングルームのマットレスを畳み、キッチンへ行く。冷蔵庫からオレンジジュースを出して扉を閉めると、マグネットで貼つてある一週間分のスケジュール表が目に入った。

時々目覚ましをセットし忘れる誠を、遅刻させない為に、ジエムスがそうしている。スケジュールは、店の全員の分が一覧になつてゐる。

誠のすぐ上の欄にあるトレイサーのを見ると、今日が休みで明日はナイト・シフトだ。浅井友子に警戒心を『えないよつて、明日はトレイサーを引つ張つて行こうと思つた。

浅井友子が塩田綾と連絡を取つていなかつたのは意外だつたし、落胆もしたが、塩田綾に辿り着けなければ、それはそれで仕方がな

い。出来る限りの事をして、そう報告すればいいのだ。

自分の職業はセールスで、探偵や興信所ではないと開き直る気持ちも出て來た。

明るい気分で仕事に行き、ジョージが同じフロアで一階に回されたのをいいことに、軽口を叩き合いながら仕事をした。それで平穩に一日が終わってくれるかと思つたが、閉店ぎりぎりに異変が起きた。

夜十一時という閉店時間は、世界中のどの都市に比べても決して早いとは思われない。その閉店五分前に滑り込んで來た白人カップルが、長々と店内を物色し始めた。

全く馬鹿々々しい規則だとは思つが、会社では一度客が店に入つた以上は「閉店です」と追い出してはならないと言つ。

そういう下らない規則を作る側は、いつだって守らなくてよい立場に立つてゐる。

十一時を回つてマネージャーの顔色も変わつたが、当のカップルは全く気にした様子もなく、十一時半になつてようやく靴二足を決めた。

全スタッフが愁眉を開いたのは、ほんの束の間だつた。

彼らは当たり前の顔をして、ディスカウントを要求した。会社にもよるだろうが、誠の勤めるブランドでは、ディスカウントはない。マネージャーがそれを説明したが、彼らは納得せず、揉めに揉めた拳句、「一度と來ないぞ」というお決まりの捨て台詞と共に、何も買わずに店を出て行つた。

後には、口には出せないが「一度と來るな」という雰囲気を滾らせたセールス達が残つた。

誠も腹立たしい気分が残つていたし、ジョージとアンジエラがどうしてもと言うので、異例の事だが、ユニフォームの儘でナイトクラブへ繰り出した。やはり怒つていた警備員のジョシュアも付いて來た。

空きつ腹にアルコールを流し込んで、ダンスフロアでヤケのように踊り、ついでにアンジェラに言い寄ろうとした白人を、男三人で小突き回すようにして追い払うと少し気が晴れた。

「さっきの客さあ」

「大分柔らかい顔つきに戻つたアンジェラが、話しかけて来た。
「きっと本当は、あんまりお金持ちでもないんだろうね。バケーションに来て、高級ブティックでちやほやされてみたかったんじゃない？」

「接客は丁寧にしてるよ。普通の営業時間内に来て欲しいな」

「とつぐに閉まってる事に気がついたのが遅くて、さつと店から出られなくなつたんじやない？ デイスカウントねだつたのだつて、本当は買つ気がなかつたからかもしれない。いつもと違う場所に来て、違うことしたら、わけ分かんなくなつちゃつて暴走したんじやない？」

「そんなもんかな？」

アンジェラの言つ事は分かる。旅先にいる解放感から、普段ならしない事をしてしまつというのはありそうな事だ。

「いくつになつても、自分の中に知らない部分つて、多分あるわ」

微笑んだアンジェラは、誠よりも精神的に遙かに大人に見えた。

ナイトクラブを出たのは三時過ぎだつた。アパートのドアを開けて、誠はジエームスを起こさないように、いつもより静かに行動した。ジエームスは誠が飲酒運転をするのを恐ろしく嫌がるからだ。疲れてもいたし、すっかり汗臭くなつてしまつたユニフォームを脱ぎ捨てるど、マットレスを敷いて、歯も磨かずに横になつた。眠りに落ちる寸前、思い出して目覚ましをセットしたのは上出来と言えた。

田覚ましの音で目を覚ますと、案外頭はすつきりしていた。

昨夜、飲むには飲んだが、やたらと元気良く踊つていたのでアルコールは抜けたようだ。その代わり無闇と体が汗臭かつた。冷蔵庫

に飲む物を探しに行くと、ジョーモスからの伝言が目に入った。

「飲酒運転は良くない。君が捕まつても身柄を引き取りには行かないぞ」

昨夜の所業はばれていたらしい。コップ一杯のアップルジュースを一息に飲み干して、シャワーを使った。時計を見ると、十時少し過ぎだ。

浅井友子との約束は十一時半で、トレイシーも待ち合わせ場所に直接来る事になっている。JH迄は車で精々十分だし、キャンバス内で待ち合わせ場所を探す手間を考えても、十一時に出れば余裕で間に合う筈だ。

誠はジョーモスの書斎に入り、自分のメールを開けてみた。塩田綾関係で何かメールが入っているかと思ったからだが、思った通り兄からと、塩田文美からの二通が入っていた。

兄の方はともかく、前回のメールに返事を書いていなかつただけに、塩田文美からのメールを開くのは苦痛だつた。兄からは、家賃等の経費は院長先生から頂く事にしたとあり、更に警察への届け出はもう少し待つようになつた。

そういえば、まだ塩田綾の家賃の領収書を兄に送つていなかつた。ヒラタ氏にもらつた領収書をスキヤナーで読み取り、メールに添付して送る。

それだけでもう既に一仕事済ませたような気分になつたが、塩田文美からのメールが残つていた。

今回は挨拶程度でも、返事を書かなくてはと思いつつメールを開けると、前回よりも長い文だつた。重ねて迷惑を詫び、さらに父親はやはり警察への届け出を嫌がつているとあつた後に、塩田綾がハワイに来た理由があつた。

前のメールでは、書かなかつたことがありました。実は、姉がハワイに行くことになつたのには、理由があります。

姉は不倫をしていました。一十六か七の頃からです。

関係が相手の奥さんに知られて、奥さんが家に話しに来ました。

姉は土下座もさせられましたし、念書も書かされました。

相手の方が父の病院に勤めるお医者様だったので、仕事を続けることも難しくなりました。何より父が怒って、しばらく日本を離れることになったのです。

片方だけが悪かったはずはありませんけれど、田舎では何でも女性に不利な考え方通ります。

姉が器用な人ではないと前に書いたのは、そういう事があったからです。姉に会つたら、どうか厳しい事を言わないでやって下さい。

本当なら、こういうことは興信所にでも頼むべきなんでしょう。でも、父は世界中の人自分を知っていると思うよつな、変な錯覚を持つっています。興信所なんて怪しげで、後で何を言われるか分からないと言つのです。

実際、つちの町では父は有名人なので、そんな錯覚を持つてしまうのでしょうか。こういうのを田舎者と言つんですね。

金銭的にも負担をお掛けしたとも、少し聞きました。そういうことで迷惑をかけては、あまりに申し訳ありません。父はその点ではけちな人ではありませんし、必要なだけ出すと言つてますので、どうぞ遠慮せずに言つてやって下さい。

第一章・第一話 「過去」（後書き）

本文中、主人公が飲酒・酒気帯び運転を行っていますが、そういうた行為を推奨、認可するものではありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8422w/>

シャワーツリーは唄う

2011年10月10日03時25分発行